

終戦五十周年記念誌

平和への想い

岡山県邑久町

終戦五十周年記念誌

『平和への想い』刊行にあたり



邑久町長 木村 恵 昭

昭和二十年の終戦から数えて、今年は五十周年の大きな節目の年であります。

さきの大戦により尊い命を失った戦没者の方々やその遺族に、深い哀悼をささげると同時に、苦難の時代を経て築かれた現在の平和と豊かさを改めてかみしめているところでもあります。

戦争体験者が高齢になりつつあるこのときにあたり、本町では苦難の時代の教訓を心に刻み、次代を担う世代に語り継いで、世界恒久平和への誓いを新たにするため、終戦五十周年記念誌『平和への想い』を刊行致しました。私たちが忘れかけていたことや、知らなかったことなどの数々が記されております。原稿をお寄せいただきました遺族をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

終わりにになりましたが、お忙しい中を編集に御尽力賜りました木村安雄先生、万代三郎先生に心から感謝申し上げます。

目次

終戦五十周年記念誌

『平和への想い』刊行にあたり

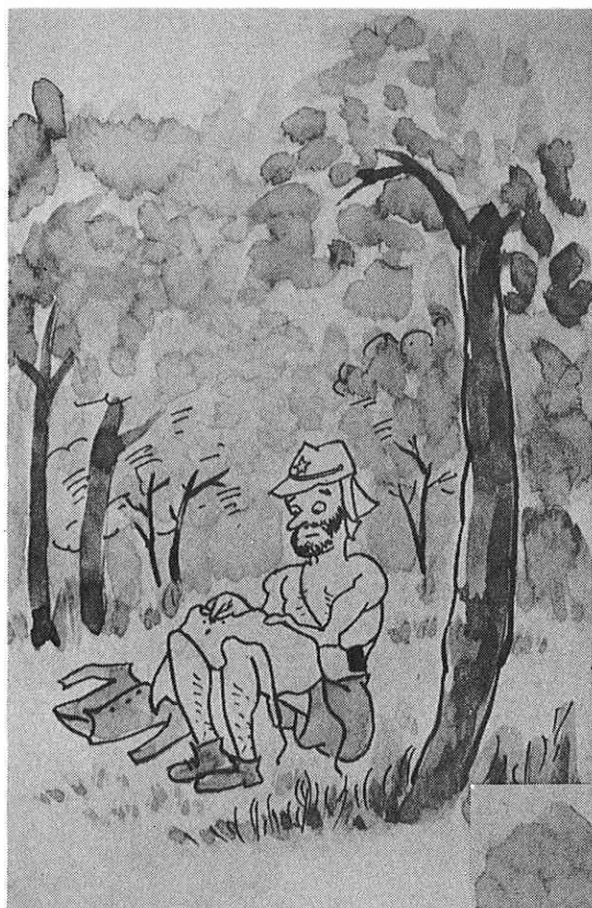
戦後五十周年誌写真集

歌で追う私の戦争	浅原百枝	1
被爆五〇年に思う	池内保高	5
戦後五十年の歩み	出井正義	7
死線を越えて	岩井敏男	8
「五十年前を振り返りて	岩井トシ子	12
平凡な私の体験	上野克太	14
秘めた想い	大河原京太	16
「なるようになる」は意味深長	太田實一	19
運を得て還る	太田巧	20
巨久の農業 農家の立場から	太田保	25
被爆五十周年	大森ヨシエ	27
シベリア抑留記	神坂満	29

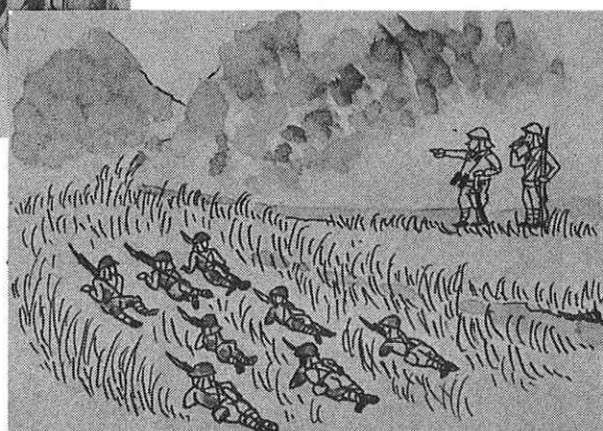
終戦の思い出	時岡弘太	32
ビルマ戦塵	木村一	35
岩国大空襲	是信弘	41
私の海軍	是信弘	44
海軍特別幹部候補生の体験	坂口一海	48
支那事変従軍の思い出	佐藤梅夫	49
終戦五十年を振り返り思うこと	柴田英男	51
兄妹五人が戦いに参加した事	下地倭子	52
一兵卒の追想	田代正人	55
私の戦後	業合隆雄	57
戦後五十年、私の歩んだ道	半田愛子	60
思い出深い郷土	久本綾子	62
原爆体験記	南孝	64
戦記	森輝雄	65
あとがき		69



終戦五十周年記念誌写真集



看護兵：兵舎の前にて
写真提供：下地 倭子様



兄の出征：陸軍兄弟のスナップ
写真提供：下地 倭子様



写真提供：下地 倭子 様

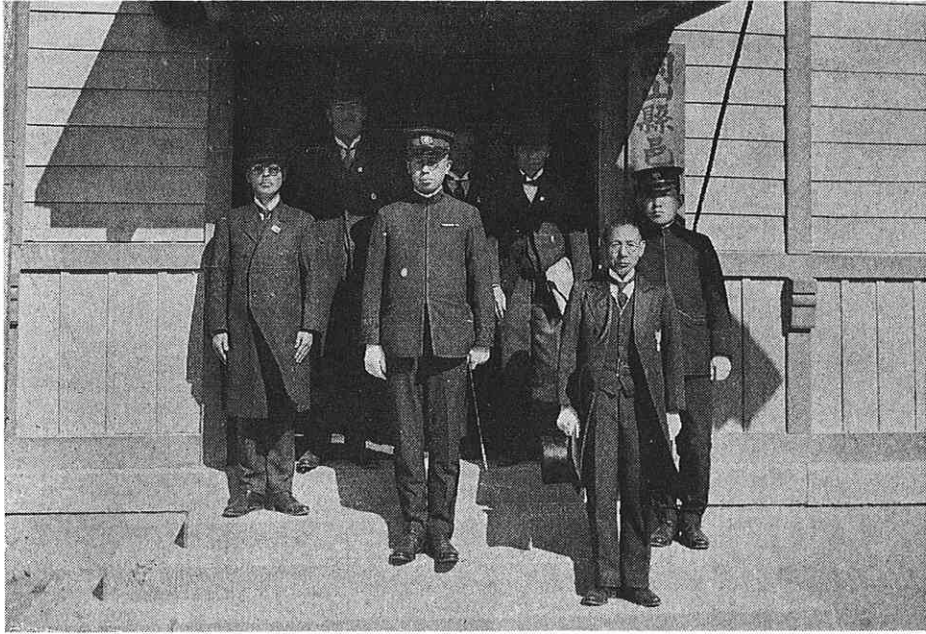
出征前 家族写真（母方）



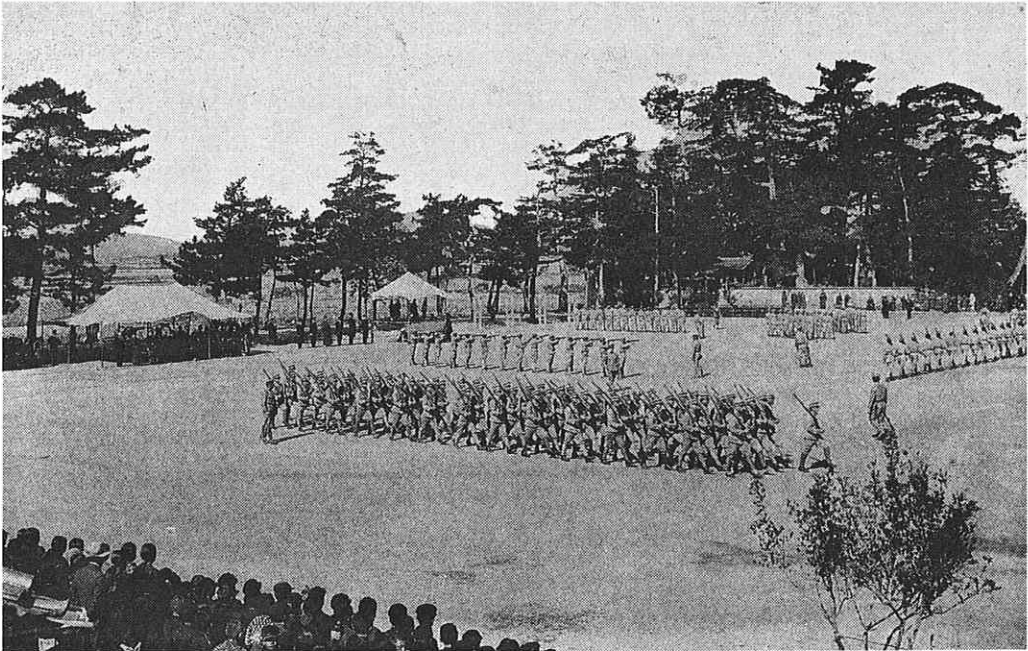
昭和19年10月 出撃前
写真提供：太田 毅 様



下地 陟 様：現地の子どもと撮影
写真提供：下地 倭子 様



侍從御差遣記念 玄関前の侍従山縣公爵
写真提供：末石 恭一様

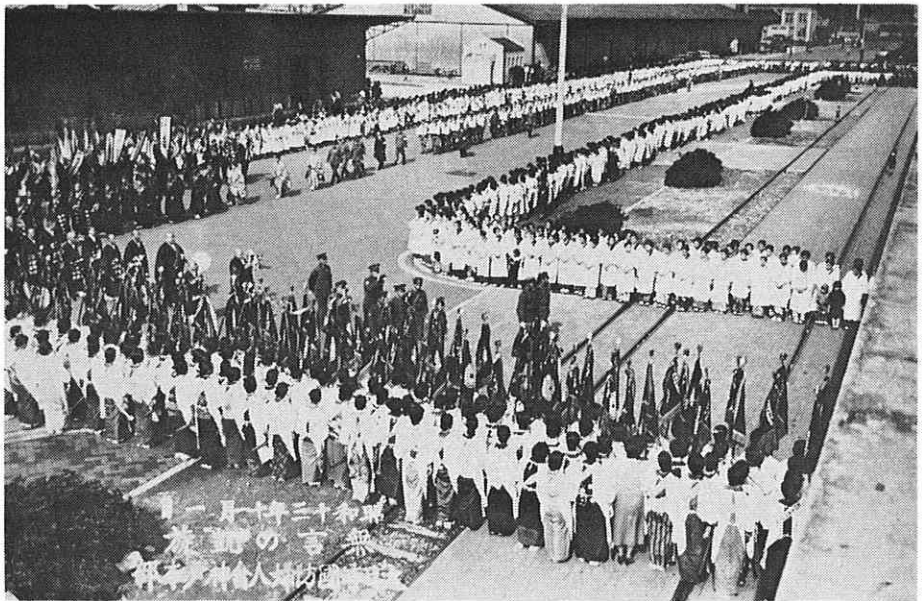


侍従山縣公爵生徒教練御視閲 於：岡山県邑久土曜学校
写真提供：末石 恭一様



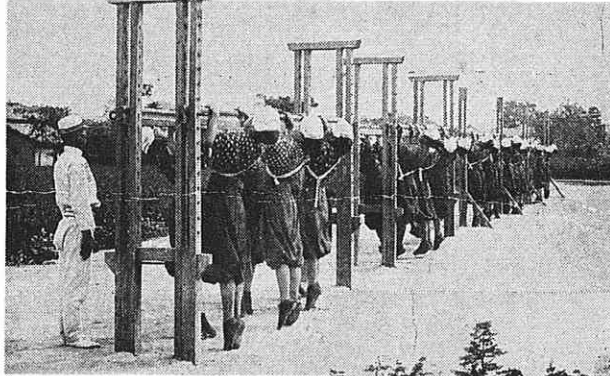
無言の凱旋

昭和13年11月1日

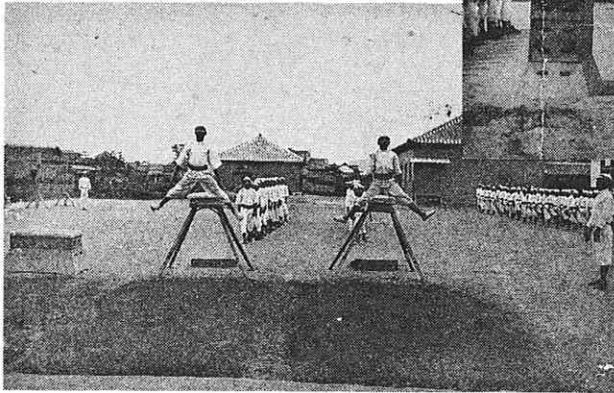
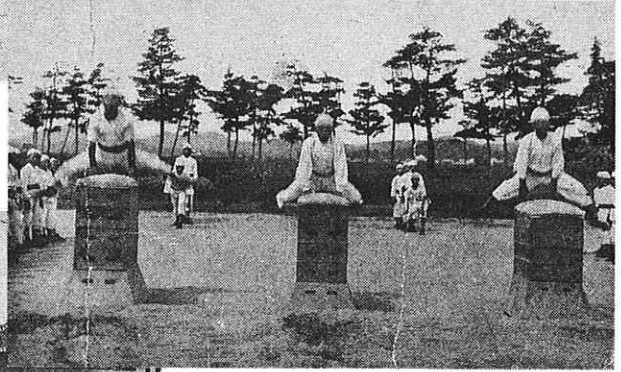


無言の凱旋

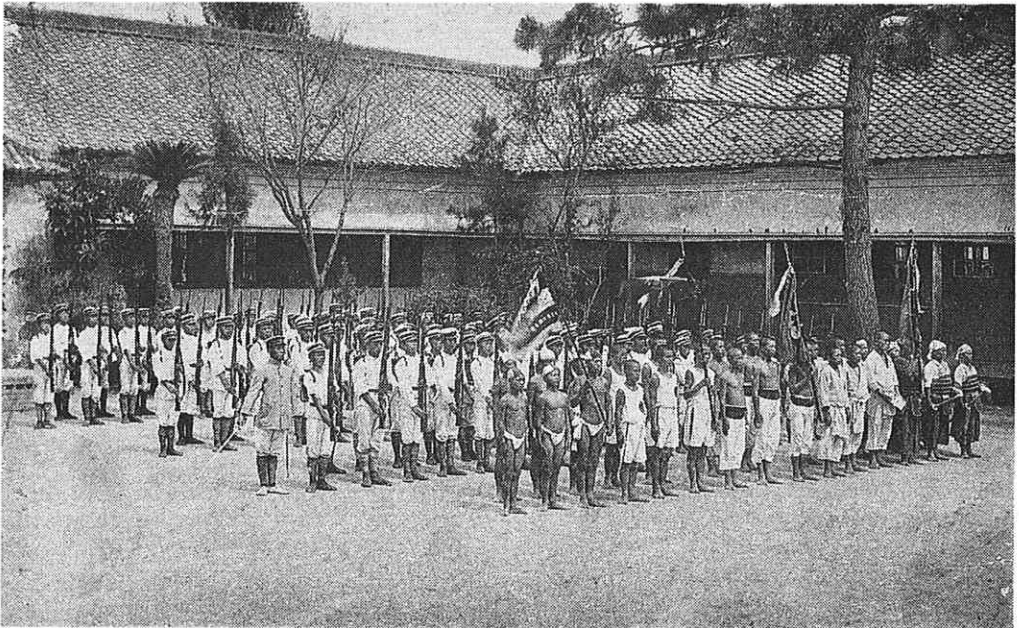
昭和13年11月1日



懸垂運動



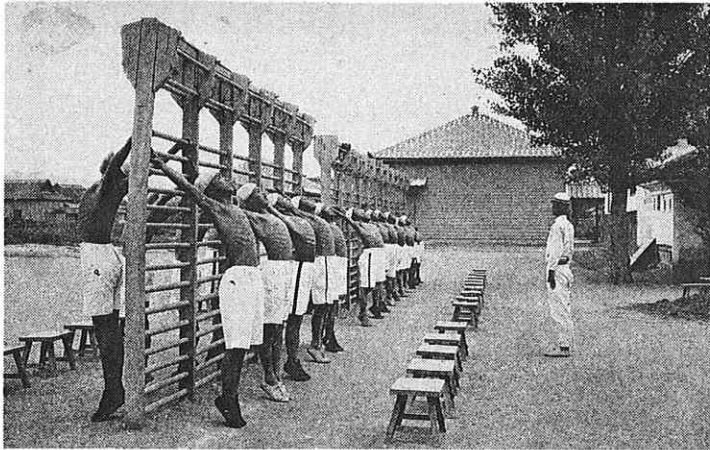
▲ 跳躍運動
◀ 中隊教練



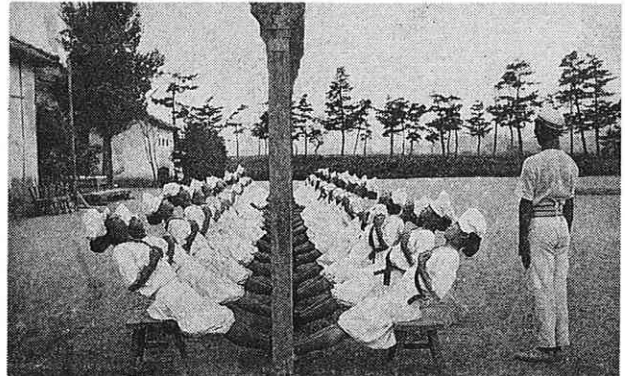
邑久高等小学校児童体操
写真提供：末石 恭一 様



中隊教練



胸ノ運動



腹ノ運動

邑久高等小学校児童体操
写真提供：末石 恭一 様



銃後の婦人



学童奉仕



戦時中 幼い子も奉仕



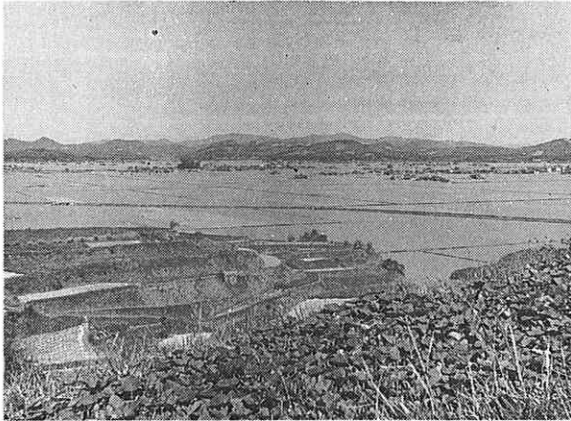
出行留居家族へ奉仕



戦時中大炎訓練



出征兵士武運長久祈願 昭和17年正月



水害風景
円張から尾張を望む

<昭和20年9月大水害>



大水出にイカダにのって



千人針
出征した肉親のために

出征兵士



女子青年慰問袋作り



平成7年度 岡山県戦没者追悼 戦後50周年式典 於：岡山武道館



岡山県戦没者追悼式にて 邑久町遺族会地区会長と婦人部長

歌で追う私の戦争

浅原百枝（七十四歳）

尻海九七八 神職

○八月はわれの忌月とほき日に征きて還らぬ夫が島見ゆ

○灯心の灯をかき立つる危ふさにヒロシマの空八月を燃ゆ

○万灯会鼓を打ち鳴らす八月の苦渋はるけく薪能見る

○古疵をなぞる痛みに八月の戦忌はわれを空虚に置かぬ

八月がまた来ます。終戦記念日が近づく、もう五十年も経た今もなお当時の事が甦り、私の胸は疼きます。この世に命のある限り忘れる事の出来ない、戦争と言う深い疵痕の痛みです。

私はいわゆる戦争未亡人として、遺された一児を連れ、祖父姑と共に戦後を生きて来ました。

○赤紙が来たよと昨日生まれたる子に言ふ如く唇よせ言ひき

○もの言へど声にならなく込み上ぐるものあり黙し只領きし

○父と子の縁短かし征くまでの五日を吾子の襦袢かへくれし

○産褥の床に夫より面会を乞ふとふ電報にぎりしめぬき

○招集が来たよと夫が近ぢかと吐息をせしは夢なぞになく

昭和十八年六月、結婚生活一年にして、わが子の誕生を喜びあう暇もなく翌日、夫に召集令状が来ました。兵庫県神野村、第六十六部隊へ入隊せよ、と。その日までの五日間の慌しさは筆舌には言いつくせないものでした。

私の家は古くより代々家職として、その土地の氏神に奉仕しており、当時、私も若い者は、尻海の神田稻荷社の方へ務め、祖父が家を守っていましたが、既に八十歳の高齢でしたので、必然的に両方の神務に関わっていません。戦時中の神社は毎日、武運長久祈願、出征兵士の出陣式と、一日も留守にすることは出来ませんでした。

夫の出征後の神社を守るため、私の弟が備前一宮の安仁神社へ務めていましたのを、否応もなく呼びよせ留守中を託して、出征いたしました。国民皆兵の時代、一国の大事に家庭の事情など容赦なく、召集令状と言えば至上命令、こうして次々と、戦場へと狩り出され、家の大切な柱である男性たちは毎日のように、軍靴を鳴らし村を出て征きました。

しかし、昭和二十年代には敗戦の色は濃く、誰も口には出しませんでした。予感のようなものは身近に迫って来ましたが、空襲は日々に激しく敵機の爆音に怯えつつ、水島辺りまでもそ

の爆撃は見えるようになりました。遂には岡山大空襲があり、広島長崎へと原爆投下され、これをもっていよいよ無条件降伏、すなわちポツダム宣言受諾となりました。

○終戦のみことのり聴き転戦の夫の還りをそぞろ待ちるき

○一片の紙にし夫の死を告ぐる文字のみ骨のかけらさへ無く

○断腸の思ひまさしく遺されし児をかき抱き幾夜泣きしか

○わが泣けば膝をひねもす離れざる幼子ゆゑに立ちき切なく

○國破れ夫は還らず誰がために装ふや朝の鏡むなしき

○ある時は児にせがまれて肩車おどけて父の役も果たせり

○南海の孤島に埋もる夫の骨いまも還らずわが抱くなく

○出征の間際に生れし子の面輪いく夜顯ちけむ夫のまなぶた

戦争は遂に終わりました。出征の日から三ヶ年、夫との手紙のやりとりは一度もありませんでした。一方的に南方の島の絵葉書が、南海派遣第六〇九四部隊の検閲済の印のある短いものでした。こちらからはせせと子供の様子など書き送りましたが、手に渡っているのか、途中紛失しているのか全く通じない虚しいものでした。

終戦後つぎつぎと戦地よりの引揚げが始まりましたが、待てども待てども、とうとう還っては来ませんでした。一度岡山県

世話課へ問い合わせましたところ、南海沖部隊はすでに引揚げを完了しているので、未だ帰られないなら大方戦死されたものでせう、と言う薄い紙一枚の返事、今も茶色に変色したまま私の手許に残っています。

昭和二十一年八月、正式の戦死公報を受取りました時点で、遺された一児を連れこの大土井の地、主人の生家へ戻る事になりました。

神社の名儀は弟に替わり、その後も引続き両方の神務を切りもりして呉れていました。戦後の神道指令により、一宗教として存続されました神社界の変動は大きく、大変なものでしたが、氏子全般の協力のもとに、歳月の流れと共に次第に落ち着いて来ました。その間に戦後初めて女子神職の制度がおかれ、東京に次ぎ、岡山でその講習が開かれましたのが二十二年その春ようやく夫の葬儀を終え、まだ立ち直る気力もありません。まもなく、家職を守り継ぐ決心をして受講、神職の資格を取得いたしました。例大祭、公事の大半は弟に頼み、身近の神用、境内地の管理清掃など杜の中での生活が始まり、今日に至って居ます。

○この職に傾け果てむ一生なりあら吹く時も行かん外なく

○本殿のみ簾まきあぐる重さにてわれに始まる新年の行事

○お日待の朝を装ふ指貫の裾短めに濃霜踏み行く

○新年のみ祝の祀り終へて踏む午前三時の玉砂利かたし

○足音のときれぬほどに砂利を踏む人の気配に祭を籠る

○天与とはおほらかなもの見の限り白果てしなき今朝の雪かも

○誰一人踏みし跡なき雪齋庭まづわが行かむついでたちの朝

○来む人はみなこの門をくぐり行け今日雪の門きぞ風の門

○父祖よりを生き継ぐ里のまほろばに祀りを集ふ平穩のあり

○職として朝な朝なを掃く境内に今日は余得の花吹雪うく

○新米を三方にもるねむごろを吾がけがれざる部分と思ふ

杜の生活の中で唯一の趣味として、四季折々を目にふれるもの、鳥を歌い祭を詠み、又誰にも言えない苦悩を歌として吐き出し身を軽くしつつ、思い知らず七十を越える迄も長生きしてしまいました。夫がもつと生きたかった分をわたしに呉れているのかも知れません。

○松根油とるとふ村の呼び出しに兎を負ひて行く苛酷もありき

○砂袋、火はたき水槽、壕掘れと言ひにきすでに負ける戦か

○配給の米の代りにキューバ糖これで生きよと言ふかまともに

○夜なべの灯下げて自らすりへらす如くに縫ひき子の育つ頃

○針箱の引手も吾子が育つ日の玩具なりしよカチャカチャと鳴

る

○幼子の口をふさぎて庭へ出て姑を恐れし日ははるかなり

○手を取りて口に教はるものならぬ嫁と言ふ座に得しもの幾つ

杳いとおい日の想い出の歌です。

○戦没者妻の実態調査表、生存子一人に大き丸付す

○靖国の国家護持言ふ候補者を推してむなく五十年を経つ

○政談を聞きて星夜をもどり来ぬ握手かはせし人信じたし

○町長が兵の御霊に告ぐことば一語一句に耳を傾く

○訪米の首相の声の澄みてありかかる地球に戦よなかれ

○侵略と時の首相が言ひはなつ戦に召され夫は飢ゑにき

○この中に夫の動きもありぬべしソロモン戦記さめて詠み継ぐ

○天命とうべなひがたき夫の死ぞ聖戦と言ふことばむなしき

○半世紀すでに戦後は終れりと人は言ふなりわれには一生

去年は義弟の五十回忌、今年が夫の五十回忌と我が家に戦死の墓碑二基が、軍人墓と言うにはとおく小さく、古りつつあります。

○あな此処ぞ終を安らふ奥津城か松風をきき土に還ると

○写し絵に追はねばかすみゆく夫の若き軍帽ぬがし得ざりし

○吾もまた戦争受難者よ夫を恋ひ報ひとばしき白髪を梳く

○ひと年を妻と言ふ座に子をなして母とふ責に五十年を過ぐ
○父の顔名さへ覚へぬ幼子は淋しと泣きし一夜さもなし

去年は靖国と千鳥ヶ淵墓苑へ参拜、今年の春は縁者うち集い、
五十年忌み霊祭を齋行し、心のしめくくりを致しました。

○靖國の宮内ふかく回廊をゆくとき不意に鳩が羽ばたく

○幾万の兵のみ霊が眠る苑千鳥ヶ淵とその名やさしも

○一片の骨さへ還るなき夫の五十回忌に己ふりたり

○食に飢ゑ病に斃るるあまた兵救ひ得ざりしとき日無慘

○半世紀すぎて漸く相對ふ兵の墓苑は桜いまだし

○夫の遺骨も此処の墓苑に眠るべし沓き戦の修羅をおさめむ

ソロモンは余りに遠すぎて行けず、せめても青い海の色を見
つつ亡き人を偲ばんと、沖繩の南方戦死者の慰霊碑に對き幣を
捧げました。

○南海に続くこの海なぎわたる摩文仁ヶ丘に佇ちて夫恋ふ

○靴底に軋みて鳴れる白珊瑚夫の骨踏む痛みに拾ふ

○ソロモンはとほうずもなく遠き島その海に對く碑に幣捧ぐ

○幾十度夏は巡るに南海に逝きにし夫はとことは二十歳

○かくわれを独り身となし放ちおく日本は遠し軍靴が響く

○泣けるだけ泣きて晴れたる胸の裡摩文仁ヶ丘の陽は背に暑し

○夕映の摩文仁ヶ丘に拾ひ来し巻貝おもく砂をふくめり

○敗戦とふ古疵にベール被せ置きて大和の何を今見むと言ふ

○戦にはわが孫も子もゆかせまじ國の掟と鞭うくるとも

○遺された家族が法の不備に泣くわれの苛酷は忘ることなし

戦争とは一体何であったのか、何のために赤紙一枚でかり出
されて、若い命を捧げる程の祖國であったのか等々、いま私の
思いは千々に乱れています。今になって時の首相が侵略戦争で
あったと言う。私ども遺族にとって唯一の誇りであり、支えで
あった「お國のため」と言う一語、大義名分でした。南方遺骨
収集も今秋で終了と言う。それも政府派遣とは言いながらその
費用は戦友会が集めた募金などで賄われていようとは…。戦跡
には未だ大半の遺骨が野ざらしの俛に…。これが祖國の為に散っ
た犠牲者への國の姿勢とは。戦争は「いや」と声を大にして叫
びたい現在の心境です。

○血を吐きて何に縋らむたどきなき身をこの洞におきし兵かも

○知り得たる故にわが胸うづく日を呵咍に對けば饒舌となる

○つづまりはつま恋ふ兵の妻なりき反戦の歌まだ詠み足らず

○かりそめの如くに吾に来て去りし夫とふものを永久に思はむ
○吾が心くもらひ暗し八月の夫を忘れぬことを愛とし

せめて妻だけは、いや親も子も、兄弟も勿論また國民全体がこの戦による多くの犠牲を思いやり、その犠牲の上に現在の平和があることを改めて知り、この世から戦争の文字の消える日を念じると共に、それぞれがこの五十年を節目に、一層の自覚と、誓いをもって見守って行きたいものと思ひます。

人間の目に見えるものより自然は遙かに大きく、自若泰然として在ります。

○杜がいま朝霧を濃く生みをれば木立さやさやそよぎるるべし
○歸りくる鳥をねむらせ六町の杜は昔のままに息づく
○僥倖きようこうを待たのむともなく八月の境内に降り来る鳩に餌をやる



被爆五〇年に思う

池 内 保 高 (七十歳)

山田庄六六一の二

真夏の太陽が今日も朝からジリジリと照りつけていた。あの日、昭和二十年八月六日、それは今でも私の脳裏に鮮明に浮かぶ。私は当時広島市皆実町の暁一六七一〇部隊第三中隊に所属していた。船舶通信隊である。午前中就寝許可の命令があつて、目は覚めているがそれぞれ気楽にベッドに寝ころんでおり、比較的兵舎内は静かであつた。と、突然聞きなれた警戒警報のサイレンの音、又か……と思いつつ急いで軍勝ぐんしょう(軍服のズボン)をはきながら窓の外を見ると、いつしかB29爆撃機が一機ゆっくりと市の上空を旋回している。続いて空襲警報のサイレンが響く。ややあつてその機体からツツと細かい糸のようなものが一筋下降した途端、閃光一変異様な爆風とともに視界全体が一瞬にして崩れ散つたのである。その後の様子は誰もが幾度か映画に写真に見られるとおりの瓦礫がれきの山の惨状であつた。空襲警報が出ていながらなぜ敵機の動きを見ることができたのかは誰しも不思議であり、考えられないと思われるが、本当にその

とおり見たのだからしかたがない。この日までB29は度々執ようにやって来た。私達はそのつど重い船艇甲無線機を二人一組となつて担ぎ、兵舎裏の比治山山腹に掘った洞くつに運び込むのが大変な苦勞の連続であつた。実際に警報が出る。敵機が来る。間髪を入れず市内各所に据えられた高射砲が猛然と火を吹く。が、高度が高くて僅かにおよばない。これをあざ笑うかのやうに悠々と旋回を繰り返しては何事もなく南へ去つて行くのを我々は憤懣えんえんやるせなく見送つていた。こんな状況が度重なるにつれ次第に警報に対する危機感が薄れて諸動作も緩慢になつていたことも否めない。こうして敵機は原爆投下のチャンスを慎重に窺つていたわけで、正に八月六日は絶好の、又我々にとつては最悪の日となつたのである。原子爆弾ということはだいたいぶたつてから聞いたことだが、私は我々の兵舎に強大な直撃弾が落ちたものと思ひ込んでいた。中隊の大きな兵舎が瞬時にして朦々たる埃ほこりとともに半倒壊となり、窓辺の同僚が木ッ葉に散つたガラスの破片によって血まみれになつて倒れているのを見たが、慌てふためいて命からがら兵舎から這い出したのを覚えてゐる。こうした中で幸いにも私は怪我一つなかつたのだから何と悪運の強いものかと驚いてゐる。外を見ると部隊の材料廠しやうの屋根はふつ飛び他の中隊の兵舎も無残に倒壊していたが火災は見えなかつた。額から血を流しながら片腕を包帯で首に引っ

け軍刀を引つ提げた中隊付少尉から集合命令が伝えられ、早速怪我の少ない元気な者ばかり二〇〇〜三〇〇名が集まり兵舎横の倒壊した民家からの火災類焼防止作業と、同僚の救出作業に分かれてそれこそ必死に働いた。私は火災防止作業に回つたが既に火の勢いが激しく手のつけられぬ状況で止むなく少し離れた場所の家屋の引倒し作業に従事した。作業現場近くの路はポロボロに引き裂けたシャツの下から皮膚の皮がズルズルとぶら下がつて血に染まつた手を、顔を露出してなすすべもなく泣き叫びわめきながら、市内中心部からとめどもなく逃げてくる群衆で溢れているが、目前に迫つた火の海の中ではいかんともできない。正にこの世の生地獄の様相である。又兵舎裏のコンクリートの防火水槽には折り重なつて半身を頭を沈めて死んでいる人も数多く見かけた。あまりに熱い火傷やけどによつて渴ききつた喉を潤すべく精根尽き果てた断末魔の姿である。被爆直後だつたと思つて、その影響からか後になつて黒い雨といわれた土砂降りの雨が降り続いた。翌日、海軍の戦闘機が一機飛来して、「我が帝國海軍に降伏の文字なし、最後まで戦わん」というビラを数多くバラまいていたが、我々は只うつろな目でむなしく読んでいたに過ぎない。たつた一個の爆弾が数十万人の命を奪い、今なおその後遺症に苦しむ数多くの人がいる。戦争がもたらすもの

は悲惨、残虐以外の何ものでもない。殊にこれからの核戦争ともなれば正に地球は全滅であろう。が、今でも地球上のどこかで人と人、民族同士が戦っているし、核実験も行われるという。私のこの様な原爆体験は命がいくつあっても足りない貴重な体験であり、戦後数えて五〇年、私達はあの忌まわしい原爆の悲劇を思い浮かべて又新しい感慨を胸に明日の平和に向かってどこまでも力強く歩んで行きたいと思う。

戦後五十年の歩み

出 井 正 義 (七十六歳)

岡山県遺族連盟副会長

邑久町遺族会会長

福谷四三〇五

おもえば長い半世紀、過ぎ去って見れば短い五〇年でした。当時の国情を今日と比べて見れば、誠に貧乏な国であって、将来発展の為なら止むを得ない国政の姿の戦であったと思いません。

当時の姿を、今日では軍国主義とも云われますが、当時の日本の存亡を考えると、君国主義と云われ、それに従い、当時の

国民の義務を果たす為にも、徴兵の義務に応じ、国の為に命を捧げ、總べてを犠牲にして、身命を国に捧げてきたと思います。それが為、国民の義務の遂行の為にも、あげて忠国民として、赤紙一枚の召集令状に従い、總べてを捨てて、国の為一途の思いであの大戰に参加しました。

当時をおもえば、送られる若人の姿、又送る老弱男女の丸りであり、五〇年を経た今日でも、其の感激の様子が印象に残っており、残っており。そして、若人達は、故郷や家族等の總べてを捨て、あの悲惨極まる戦の場に勇躍され、海に陸に空にと、悪戦苦闘の中で各々の立場で、任務の遂行に活躍され、共に明日の命の分からない友同志が、絶ず語り合った言葉は、「死んだら靖国で逢う」と話し合う中、明日への戦に臨み、今日一人、又明日二人と友を失う当時を想起せば、唯々感無量でご英霊を偲ぶと共にご冥福を祈らずにはいられません。

そうしたなか、国民總力をあげての決戦も、総ての望みも遂に敗戦につながり惨めな敗戦国となってしまうました。

其の後、食糧不足や物資の不足の惨めな社会が続くなか、国民の再興一途の努力に、次第に復興して来ました。思えば長かったようでもあり、又短いようでもありました。半世紀の目覚ましい発展と躍進を続け、今では世界の経済大国日本に生まれ変わ

わった今日であります。しかし、其の蔭には過去の戦いに於て、尊い犠牲があつてこそ、今の経済大国日本に生まれ変わつてきました。この大きな礎であつた事を、五〇年たった今日忘れてはならないと思います。

それが五〇年もたてば當時を忘れ、又、今日の日本の豊かさに溺れ、又、国の為に尊い犠牲になつた英霊の姿も忘れてきた今日の日本を見ると、何か情ない気持ちで一杯です。それどころか今日に至つては、先の戦が侵略戦争とも言われたり、又當時の政治が間違ひであつたとかの、戦争犠牲者を冒瀆する様な今日の姿に、英霊も死んでも死に切れない気持ちであろうと思います。

亡くなつた英霊の気持ちは、五〇年がたった今日に於ても、尊い身命を国の為に捧げた気持ちは今日でも変わつていないと思います。又、英霊のご意志に副う為にも、国の為に身命を捧げられたご英霊を、国でお祭り申し上げてこそ、恒久的にご安泰が願える事になると思います。それが為には、五十年の節目に改めて當時を想起し、早急に総理の公式参拝の実現、更には国に於ての国家護持が実現を見てこそ、英霊の恒久的のご安泰も願え、更にはご意志にも副えるし、又ご英霊の最善の供養が出来、また、先の大戦の最終終局の時であろうかと思ひます。最後にご英霊のご冥福を心よりお祈り致します。

死線を越えて

岩井敏男(七十八歳)

大窪四一五 無職

「1」戦争

北支派遣軍(第一回召集)

召集令状・昭和十二年十二月の暮れ、設計部の仲間と年末休暇を利用して九州阿蘇久住連峰縦走登山を終え、下山して湯布院に辿り着いたのはもう薄暗くなつていた。予約していた温泉宿の玄関に入ると「ショウシュウレイジョウジサンス、ゲシュクニテマツ、オトウト」の電報を受け取つた。

この年六月、北支で蘆溝橋事変が勃発し、郷里でも次々と召集が来ているとの便りがあつたので覚悟はしていたが、まさか旅先で召集を知らされるとは意外だった。その夜は「よしこれで俺も男になれるぞ」と若い血潮のたぎる思いをしたのを今も覚えてる。

翌日、下宿に帰つたのは夜遅くだった。弟は一人で岡山から呉まで見知らぬ土地へ大切に令状を携えて来たせいか、目頭を潤ませていた。

正月は十日に入隊とあって、忙しくお別れの挨拶に回る。病床にあって喘息で声が出ず、とても苦しそうな老人を見舞った。ようやく手振りで私の挨拶に応えられたが「人間は誰しも必ず死ぬんだ。年を取って死神に連れて行かれるよりも若くて元気な時に自らの意志で、みんなに惜しまれるような死にかたをしたい」そう教えられた気がする。

出征・三月十四日の夕方宇品港を出帆、日が暮れると点々と燈台の灯が見えはじめ、徳山あたりの街の明りを印象深く脳裏に刻み、早春の祖国に別れを告げた。

大連から軍用貨物列車で北京に到着する。北京から更に貨物列車で南下し途中大黄河の鉄橋が爆破されており下車。岸边に立って生まれて初めて見る黄河は大海原のように広がった。

泥水が渦巻いて滔々と流れるのを眺めているうち、祖国を遠くはなれ戦場に近づいている感がひしひしとせまる思いがした。

出征して初めて敵に襲撃され応戦発砲する日が思いがけなく早くきた、それは私の戦塵にまみれた支那事変四年間の始まりであった。部隊連絡のため便乗した軍用列車が突然襲撃され、鉄道を爆破されたのだ。入隊して初めて上官の命令なしに引金を引いた私の第一弾は、線路から僅か百メートルばかり向こうで土煙をあげた。慌てている自分が我ながら恥ずかしかった。

野戦勤務も二年を過ぎるころにはビュンビュン撃たれていて

もそれが的確に自分を狙って発射された弾かどうか分かるようになり、俗に言う弾の下を潜った男になってくる。

日本を遠くはなれて戦場で戦う兵士は常に死が念頭にある。死の恐怖から脱却し、運命を是認し、如何なる困難に遭遇してもおのれをみつづける平常心をもち、自分を越えた自分にならねばならない。覚悟が出来るまでには時間がかかった。

右腕と右肩をめちゃめちゃに撃ち砕かれた岸見兵長を抱えて飛び込んだ暗夜の壕の中。

砲弾が落下するたびに埋もれるほどの土砂をあびる。

「分隊長もっとしっかり抱いて下さい」

満身の力で俺の首に抱きつき、そのまま膝の上で神となった彼！

岸見兵長よ！俺もつづくぞ！

南方派遣軍（第二回召集）

機甲化兵団編成・昭和十六年九月二十九日臨時召集、宇品港を出帆し台湾の基隆港に上陸した。

戦闘で迅速に要地奪取の先陣を行くのが戦車部隊で、追隨する重砲車両の迅速な推進が戦果を支配する。その進路の障害物の突破は特に重要作業で、そのために編成された我々重門橋工兵部隊は、敵前作業が本命であった。

現地の日本人小学校を宿営にし、早朝あるいは深夜に台北近

くの川で戦車の渡河上陸と架橋演習が連日行われていた。

演習の厳しさと敵前上陸の不安で、兵士達はくたくたになって宿舎に帰っていた。ある晩、籠かごにいっぱい台湾バナナが、若い美人の先生から陣中見舞いに届けられた。このとき、若い兵士達は感激で声を詰まらせながら歓声がどよめいた。この夜の出来事は五十年経っても思い出に新しい。

十一月二十六日基隆港を出航、企ま図秘匿のため船団は組まずバラバラに出航し翌朝は南支那海の大海原に出ている。南進する輸送船団の左舷げん遙か水平線に二隻の駆逐艦らしい護衛艦が見えたとき、不自由な貨物船内の生活も忘れ心強く頼もしく思った。

数日たった朝「陸が見える」と騒ぎだした。右舷遙か霞んで山並が見え、次第に陸地がはっきりし日暮れ近くになって港外に停泊した。カムロン湾とのこと。カムロン湾に仮泊し更に南進が始まると、兵士にマレー語の手引が配られ、内地で見たこともない夏服が支給された。やがて太平洋戦争の戦線布告を船内で知らされた。

マレー攻撃・完全装備を身につけ上陸用舟艇に分乗し本船の船尾を回ると十数日振りに陸が見えた。遠浅の海岸には椰子やしの木が並んでいる、内地の海水浴場と変わらぬ風景に、一瞬日本に帰ったのかと錯覚した。

先行部隊がマレー国境を突破し、そのあとに我々も続いた。当時の日記帳から抜粋

・・・上陸地点には陸揚げされた軍用資材が積み上げられ兵員は次々と舟艇で上陸し、集結を終った部隊は慌ただしく先を競って前線へ急いで行くが、支那事変ぼん勃発以来四年間を野戦で過ごしたものには物足りない上陸だった。

屍山血河を覚悟した上陸地点では、真っ赤な口をした現地人が椰子の実を割って差し出してくれたり、前進中に道で出会う避難民は立ち止まって右手を高く上げて我々に好意を示される。支那の民衆とは全く違って、意外な雰囲気だ。

前線は何処まで進んでいるのか見当もつかない。ここは戦場なのだろうか。

国境線のゲートを越えると急に道路が良くなった。林を通り抜けて急に視野が開けたとたんに息を飲むほどの戦場風景に目を見張った。擱坐かした敵の戦車が行くほどに数を増し、屍し臭がむっと鼻を突く。インド兵の死体が二つ道路脇の湿地に転がって、南国の太陽がキラキラと光っている。

少し行くと道の中央でも擱坐した軽戦車の座席でオーストラリア兵らしい屍体があり、腐敗もなく生々しい感じで、今にも壮絶な悲鳴をあげ、苦悶のうめき声が聞こえそうだ。

橋梁きょうりょうもこの辺りからは全部爆破されているが、先行した工兵

隊の手で応急の通過設備はしてあった。しかし我々の中隊車両全部が通過するには一時間もかかる所が、カ所あった……。

マレー半島西海岸に沿って南下進撃した。その速度は戦車の進撃速度とまでに言われているが、その陰には我々工兵の迅速な作業速度があったと自負している。クアラルンプール・ゲマスなど市街地の手前では必ず敵の頑強な抵抗に遭遇した。敵の砲兵陣地も近いとみえ、発射音を聞くとすぐに砲弾が落下し、破壊された橋梁の復旧作業をする兵は待避する時間がなく、次々と戦死者が多く出た。

戦車地雷の搜索撤去も、工兵は先頭車にむきだしで砲塔にしがみついて乗って行く。地雷よりも、道のカーブを出た所に布陣した敵の速射砲で、多くの戦友を失った。

ムアー河の河口での夜間渡河輸送作業では、マラッカ海に停泊する敵艦船が絶え間なく照明弾を打ち上げ、我々の舟艇が運行する度に正確に着弾する艦砲射撃を頭上に浴びせられた。

二月四日クスタイ三叉路露营地に到着。東方にジョホール王宮か教会かと思われる尖塔を望みながら、道路の南側ジョール水道に近いジャングルの陰で待機する。

西海岸・東海岸・それに中央道と分かれ、それぞれジョール一番乗りを目指して南下進撃した三支隊が、逐次集結し各隊はジョール橋を挟んで水道沿いに展開して、シンガポール攻

略の周到な計画がなされた。

このあいだ兵員は束の間の休養を得た。飛来する砲弾もこの地に到着してからは散発的になり、制空権は敵方にあったが戦闘機の機銃掃射もあまり受けず、嵐の前の静けさの感がした。ジャングルの樹間から対岸のシンガポール島（河幅一キロメートル）で盛んに塹壕を掘っている英兵の姿と、連日燃え続けている島の重油タンクの真っ黒い煙を無心で眺めていた。

戦友の遺骨を胸に抱き　いまジョール水道に立つ
征途万里波濤の彼方　はるかに故郷を想う

春風秋雨二十六歳この身この命この日のために
敵が百年の牙城とたのむシンガポールの要塞を
修羅の巷となして切り込むはいまぞ

我ら一人にても生き残らば我らが屍を彼の地に運びて埋めよ

我ら皆ジョール水道に水漬く屍とならば
逆巻く怒濤のしぶきともなりて彼のちによせよ

この身　この命　この日のために！
日没を待って隠密に集結を開始、重門橋に戦車の搭載も完了し万端の準備をして出発の合図を待った。ようやく出発時間の十一時三十分がきて確認の伝令が飛んだ。

エンジンの音を殺し、はやる心を押さえて、肅々と進む僚船

が暗夜のもやった水面に影絵のように透かして見え心強かった。敵陣から強力なサーチライトが河面を昼のように明るく撫でまわす。河の中流に来たとき待ちかねた青色信号弾が対岸の空に上がった。

上陸地点標示のため、隠密に櫓を漕いで河を渡った斥行兵が成功した合図だ。全舟艇がたちまち全速力を出して対岸に突進した。敵陣地の機関銃が一斉に掃射して立ち向かってきた。舟にも搭載した戦車にもバリバリ命中し始めた。誰かやられた予感がした。暗夜で顔も姿もみえないので番号を掛けさせた、十二番まで返事があり安堵したが被弾した舟が沈みだした。岸が近いと見て飛び込んだら胸まで漬かったが足が届いた。自分の分隊全員を飛び込ませ、戦車を搭載したまま、舟を押し上げた。戦車の砲手も弾の飛ぶ中を戦車に飛び込み砲撃を始めた。

「2」敗戦

我々日本は敗戦国となり、戦争にかかわるもの一切を抹殺した。悲惨な記憶を持った戦争の中の自分を抹殺し、口をつぐんで語ることさえしない。その余り、抹殺してはならないものまで断ち切って、自分と言う人間の主体性まで失ってしまったのではないか。

国家もまた主体性を失い、ひたすら他国に迎合した。こうすることで外交と経済の復興をはかってきたように思う。これが

日本の本物の繁栄なのだろうか。

国の存立を、何をよりどころに求め、いかなる分野で主張が許されるのか。他国の冷徹な眼、いわれのない干渉や弾圧を、このまま受け続けていて、日本の展望はあるのか。

いまだにおさまらない、列強国間の利害衝突をみると、必ずしも正義の側にあるものが勝つとは言えまい。

日本は再び世界の孤児になる恐れはないか。世界が日本を友としてくれるにはどうすればよいか。果してそれが望めるものなのか。

戦争の悲惨なそして貴重な体験が抹殺され、断ち切られたままで、我々はそこから何も学んではないのではないか。

「五十年前を振り返りて」

岩井 ト シ 子 (七十五歳)

大窪四一五 無職

「欲しがりません、勝つまでは」と、あらゆる欲望をかき捨て、赤紙一枚の召集令状に、家の息子も、隣の主人も、高等小学校を出たばかりの、幼い少年までが、出征し、後には、老

父母と、女、子供ばかりが残されて、未婚の女性は女子挺身隊として、軍需工場で働き、農家には、肥料も少なく労働力も足りない中、近所同士で助け合いながら、食糧増産に励みました。仕事の合間には、武運長久を願って、百社参拝に、遠くまで神社を探しながらお参りし、戦地での無事を一心に祈りました。

千人針

銃弾よけの腹巻として、並巾白木綿で、長さは胴回り程、巾を二つ折りにして、千個の赤い印をつけ、女性一人が一個、糸で、祈りを込めて結んでもらい、お守りとして戦地に送りました。

松根油製造

極度の油不足を補うため、航空機燃料用の油として、山から松の根を掘り、長時間をかけて蒸溜し、油の製造をしていました。当地では、大賀島の登り口に釜があり、年配の男性が奉仕作業に携わっていました。

終戦

このように、一丸となって戦っている中、突然、終戦の報道があり、体中の力が抜け、熱い涙が込み上げて来ました。しかし、もうこれ以上は、戦死者を出すこともなく、召集もなくなると、張りつめた心に、ほっと安らぎを感じました。これからは、飛行機の音に怯えることもなく、電灯も明るく点すことが

できる。それまでは、灯火管制（電灯に黒い筒状の布を被せ、外部に明かりが漏れないようにする）であった。終戦で、安心した我々は、それまでの苦労をバネにし、懸命に、復興に励めたように思います。

台風水害

終戦で、ホッと一息、安堵する暇もなく、九月十八日、暴風雨に見舞われ、吉井川の天王地区決壊による大水害となりました。稲穂の出揃った水田はもとより、全戸が、床上浸水となり、低い所は二階までも浸水し、屋根に避難する家もあり、一面が濁流に浮かぶ屋形船のようでした。ほとんどの家で飼っていた農耕用の牛馬も何頭か死んでいたが、この近所では、藁グロや、バルコニーへ上げて、難を逃れました。三日も雨が続けば大水になる、そんな中、十月上旬、平和なら秋祭りの太鼓の音を聞こえるころ、又水位が増して来て、二度目の水害に見舞われました。

一度目の復旧が出来ず停電したまま、ローソク住まいの中で、夕方、二人の兵隊さんが歩いて帰って来られました。円張の方でした。大橋まで帰って、橋が流され、家へ帰れず引き返して来られました。夕食に麦の雑炊を食べていただき、乾き切らぬ座板に箆を敷いて一夜を明かした日のことは、五十年経った今もなお、忘れられない思い出です。

平凡な私の体験

上野 克 太（七十五歳）

北島六六

一、私にも遂にきた赤紙臨時召集令状

昭和十八年四月（一九四三）も終わろうとしていたとき役場の吏員さんが恒例のように、おめでとうございます。召集令状です。と言って赤紙の令状を持って来られました。当時倉敷に下宿して鉄道省広島鉄道局倉敷駅に勤務していた私は、運転関係の仕事に従事して主に軍需輸送に係わっておった関係か、召集が三年ほど延期されておりました。自宅からの連絡を上司に報告し、職場で形ばかりの送別会をしてもらい先輩、同僚に励まされ、覚悟を新たにして別れを告げ喜び勇んで帰宅、親兄弟、親類にも後事を依頼し、お世話になる村の人達にも型通り挨拶してまわりました。そして、五月一日は今城小学校で一緒に入隊する同僚と大日本国防婦人会の襷をかけた婦人会や消防団、青年団、小・中学生等多数の人に日の丸の小旗を振って励まされ、お礼の挨拶と決意を披瀝、心のこもった千人針の腹巻を身につけ、奉公袋を提げて身心を一新故里の山河にも別れを告げ

て山陽線に乗り込み、姫路中部第五十三部隊（師団通信隊）に無事感激の入隊を致しました。

二、新任陸軍一等兵に学徒動員された二等兵

私は通信兵として六ヶ月の厳しい訓練を終わり、一期の検閲を無事終了して星二つの一等兵に進級していました。或日、学徒動員の新兵が入隊、誰でもがするように起居を共にする古兵の洗濯や、靴の手入れなど簡単な身の回りの世話をする新兵が決まりました。一人は岡山県出身で京都大学のS君、あと一人は大阪商大のK君、共に優秀な青年で気の毒に思いました。初年兵教育は生易しいものでないことは私も体験して十分知っておりました。実社会や軍隊の新兵教育は厳しく辛いものでしたが、この教育で礼儀作法等のしつけができ、人間としても一人前に認められるようになるので、他の学徒兵に負けないように頑張つて欲しいと思ひ、折りにふれて励ましの言葉もかけてやりました。

然しそれも僅かの期間で、私はやがて千葉の鉄道第八連隊（新設）へ転属することになりました。二人には酒保でゆで卵を買い求め、元気で頑張れよ、と書いて弁当箱に偲ばせ黙って淋しく転属しました。終戦となり復員除隊後、或新聞でS君が広島国税局長に栄転している記事を見て、当時のことを想起し懐かしく思いました。思えば長い人生で夢のようにはかない出

来ごとではありません。

三、雪空を今日出陣に雁渡る

昭和十九年三月三日、夜来の雪の中を新調の夏服で千葉駅まで行軍、臨時軍用列車に乗車、全車両鎧戸を下ろし、デッキには歩哨が監視、長閑に汽笛を残して列車は一路西下、途中駅は猛スピードで通過、私が勤務していた倉敷駅も何のためらいもなく驀進、私はトイレで鎧戸の隙間から僅かに倉敷の通過を見届け淋しく別れを告げました。さようなら懐かしい倉敷駅。三月十八日門司出帆、夏服が南方行を教えてくださいましたが船団を組み艦艇や空軍の護衛で内地を後にしました。別れる人も送る人もない出帆でした。パシー海峡で敵の魚雷攻撃に遇い、夜の海戦で火花が散り、美しくも恐ろしい海戦で魚雷の爆発で一尺も飛び上がるような衝撃に肝を冷やしました。輸送船団の内一隻は残念ながら船団から離脱しました。船団は毎日緑の美しい海を眺め暑さも強烈で夏服でも暑さを感じました。四月四日昭南（シンガポール）上陸、強烈な暑さの中を完全軍装で行軍宿営地の椰子の木陰に到着、バナナの味噌汁にはさすが南の島に来了感じがしました。緑は美しく道路は山の奥まで舗装され治安も良好、小隊長を長にトラックに機関銃一挺と小銃のみで六名が昭南からクアラランプールの南方鉄道軍司令部まで命令受領に行きました。

四、比島で善戦した鉄兵団（主力岡山連隊）と

鉄道第八連隊

私は元、鉄道第八連隊に所属していたので鉄七に転属してからも関心が深く、帰国除隊してからも強い関心があり、手元の私的資料も大切に保管しています。昭和十九年十月十三日、比島への先発隊として昭南を出帆したが戦況悪く再度印度支那西貢上陸、鉄七へ転属となりました。本隊鉄八は比島上陸前、空と海からの攻撃で大損害を受け、兵員の一部が上陸したことを後日知らされました。鉄道第八連隊長の明雄中佐は弱少ながらも鉄兵団主力岡山連隊に協力、バレテ峠周辺の各地で悪戦苦闘屢々斬込決行、敵陣奪回等善戦を重ねたが次第に消耗する戦力で戦は筆舌に尽くし難く鉄八も全滅状態で連隊長も戦死された様子であります。この方面の戦闘に参加された将兵に深甚の敬意を表したいと思えます。鉄兵団も明治大正昭和とその永い歴史と伝統を誇った第十連隊もバレテの攻防戦を最後にその幕を閉じたのでありますが、その最後はあまりにも悲惨であったと資料は結んであります。

一方私は鉄七で中部仏印におり、連日対戦車爆破訓練を繰り返し、何となく敗色を感じており、広島に特殊爆弾が投下され多数の死傷者が出た噂も聞きました。敗戦の詔書が發布され、兵器係の若い兵隊が将来を悲観してピストル自殺をしたことも

ありました。連合軍の武装解除で西貢から大竹に上陸、召集解除となったのは昭和二十一年五月十二日でした。大竹上陸のときに見た海軍五省を私は人生の指針としております。

- 一、至誠に悖るなかりきか
- 一、言行に恥ずるなかりきか
- 一、氣力に欠くるなかりきか
- 一、努力に憾みなかりきか
- 一、不精に巨るなかりきか

五、終戦記念の日を前に

終戦から五十年が経過して私も七十五歳を越えました。先日また一人の傷夷軍人の同級生が旅立ちました。我が仁生田部落からもこのたびの戦争で十指に近い有能な青年が国家国民のために戦没しました。悲しいことです。健在であれば私達と同じ年頃で老人会員として共に余生を楽しんでいたであろうと思えば、慰霊をおろそかにはできません。ここに一楽会有志相計り砥石山の麓、家老戸霊地で千町川を眺め、千町平野を眺めているであろう御霊の墓前に花を供え香を焚き、慰霊の読経を捧げるのは残された私達の務めではないでしょうか。

私は戦争がもたらした結果について今、結論を出すことはできません。それは将来我々の子孫や世界の歴史家が判断を下すことでしょう。願わくばいつか戦争のない平和な世界が来るこ

とを期待して拙い私の体験を終わりにいたしたいと思ひます。有り難うございました。

秘めた想ひ

大河原京太（七十四歳）

山手二六三

（その一）

十年ばかり前のことになるが、比島慰霊巡礼団にFさんという初老のご婦人が、参加されていた。大阪空港の待合室で隣り合わせた私に彼女は、次のように語った。

「主人が召集され満州国佳不斯（現、中華人民共和国の東北部）から比島戦線に参加したらしいのは、まだ息子が私のお腹の中にいたころと思います。何の便りもないまま終戦。そして、主人は遺骨箱の中に紙片一枚の姿となって我が家に帰ってきました。幼い長男を抱きしめ、途方に暮れたあの当時……。あれから、もう四十年長い歲月でした。

両親を助けて田圃仕事になりふりかまわず働き、息子も嫁をもらい、孫も生まれて、ホッと一息やれやれと思つたら、もう頭には、霜を置く年齢になっておりました。永い間の念願でし

た比島の主人の墓参を思い立ち、慰霊団に参加させてもらって
おります。

一度だけでいい、と思い参加しましたが、墓参団渡比の時期
が迫りますと、主人が私を呼んでいるのでしょうか、心が騒ぎ
ます。もう今日で三度目ですが、これからも事情の許す限り、
慰霊したいと思っております。あのルソン島バレテ峠の山中で、
家族を想いながら、自分の子供の生まれたのも知らず逝ってし
まったのかと思うと、主人が哀れでなりません……。」

つぶやくように語りながら、ハンカチで目頭をおさえた。誰
でもいい、己のつらい胸の内を聴いて欲しいのだ。語り終わる
と、幾分気持ちが落ち着いたようだった。

「ほら、あそこに座っておられる、元大隊長夫人Kさん、あの
人は息子さんがおられるのに、親元に預けて再婚され、現在の
ご主人と一緒に、慰霊団に参加されておられます。ご立派な戦
死を遂げられたN隊長さんが、お気の毒です……。」

私は一兵卒の妻ですが、子供のため、家のため、これが己の
運命と思い、頑張って生きて来たのです。自分の狭い見方も
知れませんが、あの隊長夫人Kさんに納得できないのが、私の
気持ちです……。」と。

Kさんが再婚したのも事情があつたことだろう、彼女の心
の中に先夫N隊長の想い出が生きておればこそ、何回も現在の

夫とともに慰霊に行っておられる。又、それに同行されるご主
人も心の広い人だ、と私は思うのだが……。

Fさんの心の中には、己に比較して、幸せそうな元隊長夫人
に対し、心の奥底に秘められた、女の哀しい叫びを感じたので
ある。



(その二)

もう十五年にもなるだろうか……。

私は「比島の白昼夢」と題する戦争体験手記を自費出版した。これが意外に反響を呼び需要に迫られ、とうとう三版（初版八百部、二版五百部、三版三百部、計千六百部）まで発行して、希望者に無償配布した。三版がすりあがった時点、すなわち七年ばかり前、岡山市に住む親友の福田義矩を通じ、マスコミ関係に献本したのがきっかけで、山陽新聞紙上に紹介された。そして、数名の人々から頒布の申込みを受けたのである。

私の場合は、すべて無償進呈で、ただ私の戦争体験を通じた比島戦の悲惨さを知って貰うため、読んで頂くのが目的である。頒布申込み者の中に、玉野市のHさんというご婦人がいた。直ちに郵送したが、二ヶ月を過ぎてもナシノツブテである。こんな例は多いのだが、彼女の申込みの文章に、何か心に引っ掛かるものがあったので、念のため、届いたかどうかを確かめるため、ハガキで問い合わせしてみた。すると折り返し返事があり、「主人には内緒で申込みしているため、折にふれ、僅かのページしかめくることが出来ない。このほどようやく読み終わったばかりです。お礼を申し上げるのが遅れて誠に申し訳ない。同封のものは、私のヘソクリからです……。」

と若干の小為替が入っていた。手紙の模様では義弟が鉄部隊

に属し、比島バレット峠の戦闘で戦死。階級は准尉であること。非常に心根の優しい人で、満州ジャムスからの便りでは、必ず自分を励まし慰めてくれていた、と書かれてあった。

なぜ現在の夫に隠れて、本の頒布申込みをしなければならいいのか？主人をさておきなせ義姉として、弟の消息や比島戦の模様を知りたいのか？その辺の事情は、知る由もないが、文面から汲み取れるものは、現在でも亡き人に対する或る種の感情が、永い年月を経た現在でも、まだ続いているようで人間の性の哀しさを感じさせるものだった。私は、折り返し手記は贈呈したのだからと、小為替を返却すると共に、義弟の所属部隊と氏名を知らせてもらえば、調査してお力添えしたい、と申し出た。

「ご好意は有り難いが、今は、その時期ではない。ご迷惑をお掛けして相済みませんでした……。」と返信に記してあった。

私の単なる憶測かも知れないが……、

「体の弱いという現在の夫が、この世を去れば、己の、思うままの行動が出来る。そのときに……。」と。老いるとも女性の想いは凄まじい。

(その三)

「平成三年二月七日付け山陽新聞全県版で、比島慰霊の足跡という出版記事を見たが……。」と前置きして、或るご婦人からの

電話があった。いきなり「十連隊、里見隊にいたAという兵隊

を知りませんか？生還者で誰か知っている人はいないでしょうか……」と。しかし、自分の住所も氏名も言わないのは、異常である。マナーを知らない失礼な女だ、と私は腹が立った。

「一体あなたは、どこのどなたでしょうか？」

「それが、申し上げられないのですが……。」

「それでは、こちら何もうことはありません！」

私は強い語気で突っぱねた。

ややしばらくして、

「実は……Aは、私と結婚して三ヶ月目に応召、比島バレー地域で戦死、そのため私は婚家を出て、再婚しております。しかし、死んで逝った前の主人が可愛想で、かわいそうでたまりません。今までも、こっそり調べてみましたが、何も判らないのです。新聞で『比島慰霊の足跡』の記事を見て、若しや！の想いに駆られて、失礼とは知りながら私の生家に来て、電話しております。主人に知れたら、まずいのでこの点お許し下さい……。」

家庭に波風を立てないためだろう。事情が分かれば私の心も解けた。

「里見隊なら私も知っている。また、生還者もいるので、お知らせする」と、その戦友の住所氏名、電話番号を、知らせた。彼女は、神のお導きだ、と何回も何回も繰り返しながら、感謝

して電話が切れた。

私が奇異に感じることは、七十歳近いおじいちゃんが仏になった過去の人に対して嫉妬しとするのだろうか？また、同年齢のおばあちゃんが四十五年以上も経た今日、地上から消え去った人に未だに想いを馳はせ、主人に隠れて亡き人の消息を追い、最期を知ろうとし、また、神仏に冥福めいふくを祈っているのだろうか。

終戦当時のあの世相からしても世の中には、こうしたことがまだまだ、幾らでもあるのではなからうか……。

人間の秘めた想いは、打ち寄せる波濤のように、絶えることなく、初老の彼女の心の中に生き続けることであろう。

「なるようになる」は意味深長

太田 實 一（七十三歳）

向山三三九

「なる」という動詞は、われわれにとって大変なじみが深い。古事記によれば、日本は「なりなりて、なり余れる処」の神（男）と、「なりなりて、なり合わざる処」の神（女）とが結ばれて生まれたもので、日本の神はすべて成神（なりませる神）

である。ヨーロッパの神は創造神（つくる神）である。言葉の上でも、なりゆき、なりたつ、なるようになる、志がなるように、自分が意志を持って「なす」というより、春夏秋冬のなりゆきに従って、時の流れにさからわず、山川草木の中にある自然の力によって自然界がなりたつ、という具合である。「なせばなる」というのは強い表現だが、ここでもなるの主体は自分ではなく、人間を越えた不思議な力、すなわち自然の中にある生命力である。これは、人間の意志も世の中の事も、すべて人間を越えた大きな力によって動かされる、という見方に基づいている。こうした日本の世界観、人生観は、概してモーレッツ型人間には評判が悪い。たしかに、日本語では主語を略すことが多く、自分を主張する文体を避けることが多く、誰がどうするという点があいまいになる傾向はある。しかし、これをもって日本人が宿命観、順応主義のかたまりのようというのは誤りである。山川草木、花鳥風月によって自然がなりたつように、人間の社会も一人ひとりの中にある生命力や心の働きによってなりたつのである。日本人は、つくられた世界よりも、自然と共にありゆく世界の方が好ましいことを、世々代々にわたって認識している民族である。一人ひとりが時々刻々の時の流れの中で、なるというはたらきそのものを取り戻し、それを心の中で生かすことによって、自然と共に、人々と共に生きることを知

り、自分の生甲斐を知ることが出来る。戦いに散った戦友の鎮魂の詩をと念頭に漲っていたが、とりとめのないことを書き綴って終わった。永遠に平和を築き上げて守ってってくれる、戦友の魂は「なる」。

運を得て還る

太 田 巧（七十七歳）

大富七四一 齒科医師

曾ての太平洋戦争は過半数の国民は知らない出来ごとで、世の人々は日一日と脳裏から薄れて行く運命にあります。祖国のため犠牲になりし人を思えば無にすることなく悠久の平和を切望いたします。今振り返れば半世紀以前にもなる満州事変の終結以来、昭和十二年七月盧溝橋より勃発した支那事変から三年有半、昭和十六年二月岡山歩兵第四十八部隊現役兵として入隊、十日間練兵場（現在総合グラウンド）で訓練を受け、早くも我が隊は岡山を後に広島宇品港より満州に向かい出帆。玄界灘でよくゆられそのうち羅津港に接岸上陸するが、身にしみる厳寒期である。目的地の佳木斯に降り立てば一望広漠たる雪原を

徒歩で一時間余りかけ満州第四〇九部隊に転属（二月二十六日）。

ここは歩兵第十聯隊軍旗のもと三ヶ年の軍隊教育等を受けた。同年十二月八日ハワイ真珠湾攻撃により太平洋戦争に入る。十七年三月より当分の間三江省富錦県で国境警備に当たる。

十八年末兵役を終え除隊になるべく心の準備をしていたところ、八月三十一日現役満期除隊。翌九月一日付同部隊臨時召集同日予備役編入となる。明けて十九年二月二十三日陸軍第一〇〇号により編成下令（口号作戦）。翌二十四日一ヶ大隊編成完結（三大隊完全編成に小生五中隊より十二中隊に転属）し派遣のため佳木斯より出発。三月二日釜山到着後夏服に着替えたもののまだ余寒厳しく肌をさす。ここで第二派遣隊長の指揮に入り釜山港出発、瀬戸内海を通れば懐かしの郷土の村落、山々を眺めながら同月八日横浜港入港。内地の他部隊との連合編成完結。十日横浜港出発。輸送船数隻に護衛艦四隻の船隊編成。敵の爆撃を避けるべく航行。本土離れて丸二日船上より振り返れば、たゞ白い富士の頂上のみが見えかくれてやはり秀峰富士は高かった。再び眺めることができるか名残りとなるか！八日目に船隊は激しい爆雷を受け、護衛艦一隻撃沈さる。翌十九日緑の島が見えはじめたが何島か。目指すはサイパン島であったのか？我々は無事上陸。帰国の輸送船は爆撃により沈んだとか。同島守備防衛を固めるを第一とし、「三軍も師を奪うべし匹夫

も志を奪う可からざるなり」の気迫を抱いて日夜軍の任務に励んだ。たとえ死骸は島に埋もれてもと、誰もが秘めて陣地あるいは飛行場構築作業に取り組んでいたところ、二ヶ月余にして本大隊は急きょヤップ島に転進命令。その間病魔に倒れた戦友を此の島に残して、五月二十八日駆逐艦はガラパンを出港。同月三十日ヤップコロニーに上陸。第四派遣隊長の指揮に入り隊は各島に分散駐屯守備についた。その後サイパン島は一ヶ月余にして米軍上陸、次第に戦闘不利となり、玉砕の悲運にたち至ったわけです。

その後ヤップ島への郵便物資の輸送は全く絶えた情況下で陣地の構築と対機動部隊の戦闘守備に防空戦闘に参加して犠牲者を出し、又食生活も変わり現地で自活をしながら悪性疾患、風土病、又栄養失調症に罹り闘志を燃やしながらも倒れるものあり。

栄養失調現地自活の体験

輸送が絶えてより食生活が米食より変わって現地の食物となった（椰子の実、タロ芋、木の実、タビオカパンの実）又陣地構築のかたわら、原野を開いて野菜、さつま芋作りをした。（年二回収穫あり）一方野生動物（大トカゲ、野鳥）を捕る外漁労班による魚が食前にできるように身体が食物に順応出来た者は体調は回復す。私も幸にして体調を取り戻すことが出来た。

人間の身体に蛋白質と塩分は必須条件であるが植物性蛋白質と同時に動物性蛋白質のいかに体の栄養体質保持向上に効果のあるものかを如実に実感した次第である。その野生の果物（バナナ、パイナップル、マンゴー、ドリアン等）は十分であり、忘れてならないのは日本兵に対する島民感情が実によかったことである。南国であればこそ生きられたかと思われる。九月十九日よりパラオ地区攻防作戦におけるヤップ防空戦闘に参加し、機銃掃射と艦砲射撃を全島が受け、島に分散している各隊は本島ドゴール谷に夜間集結。戦闘準備するも三日間のすさまじい機銃又艦砲射撃は不思議にも頓挫^{とんざ}？絶対に上陸されるのは覚悟の上であったが静かな島に返った。その後米軍は攻撃方針をパラオ島方面に変え、本島部隊は第二パラオ作戦に参加するもペリリウ島は陥落したのである。翌年一月より第三第四次パラオ作戦にまで参加したものの八月十五日の詔勅を拝聴した時は！共に祖国の必勝を期して「わが太平洋の防波堤たらん」を合言葉に守備防衛に当たったのであるが胸を裂かれる思いがした。戦闘中止。終戦任務につくも米軍よりは紳士的な処遇を受けた。（ヤップ転進後は文通は途絶えたので郷里ではサイパンで戦死したものと思っていた）同年十二月十八日帰還船にて浦賀上陸。同日二十日復員した。

弟の経歴について概略を書き添えさして頂きます。

故海軍少尉太田毅 大正十年八月十一日生

邑久高等小学校卒業後昭和十二年六月一日少年航空兵横須賀海軍航空隊第八期予科練習生として入隊。大東亜戦劈頭母艦瑞鶴電撃隊として布哇空襲以来ニューギニア印度洋につゞいて、珊瑚海々戦に参加機上にて大腿部貫通創を受け内地帰還。全快後教官として勤務。同十九年八月九州出水基地に転属間もなく特攻隊員として出撃し、昭和十九年十月十五日台湾沖にて戦死す。

サイパンヤップ島巡拝と交流、親善

元軍医の野村勲さんは戦後島民との文通は出来ていましたが其の後空路が開通（昭和四十五年一月）するやいち早く有志数名でヤップ島を訪れ観音像の建立。又翌年は一人で島へ三十三回忌に当たり野営して故郷へ帰れなかった戦友の冥福^{めいふく}を祈った。酋長^{しゅう}ガヤンなど友好的であり又一族と親善関係を結び椰子林の一部提供まで受けた。昭和五十四年三月有志四名はヤップ島駐屯地であったチョールに野営した際は、なき戦友諸君の声が聞こえるようであったそうで、この地（マップ島）へも慰霊碑を建てるべきではないかと思われ酋長に実情を話し土地の提供を受ける。帰国後有志で打合せ会が開かれた。サイパン、ヤップの一年数ヶ月は今でも^{まがた}儼に浮かび心に残っているのか長い月日であったようだ。当時からはずでに三十数年は早くたった感がある。今は平穩の喜びを胸に秘め現地を訪問したい！運よく^{かえ}

れた私たちであるが元気で共に還れなかった戦友たちを現地
で供養することは生存者の責務でもありせめてもの慰となること
と思われる。今回ヤップ島に慰霊碑建立募金と巡拝参加を元隊
員に呼びかけ、この件をお知りになった長野士郎岡山県知事、
元浜県議会議長などのご賛同を頂き知事の鎮魂の碑の揮毫を賜
り、亡き戦友はもとより全員感激致した。昭和五十五年一月二
十九日成田空港出発。三十日サイパン島北端バンザイ岬に近い
マッピ山のふもとに日本政府が四十九年三月に建立した「中部
太平洋戦没者の碑」の前に到着。散華した十一柱塔婆の霊に導
師宇喜多僧正が読経のさい、おりから眠れる戦友が再会を喜び
故国から呼びよせたのか線香の白煙がたなびき奇しくも上空に
英霊と同じ数の白い鳥十一羽が舞う。やがて読経が終わるころ、
岬のあなたにゆっくりと飛び去った。同月三十一日ヤップ島嘗
(祭りのこと)での駐屯地マッピ島に於て慰霊碑を建立、除幕
し供養致した。

「南国に眠る戦友をたずねて」

私事巡拝当時の拙文を記載致します。

この度巡拝団の一員として参加させて頂き、供養出来ますこ
とはまたとない喜びでありこの感激は私の生涯を通じて忘れる
ことは出来ないでしょう。サイパン島の街並、当時駐屯してい
たチャランカの海岸、毎日汗を流して作業していたアスリート

飛行場周辺等々その様相は全く変わり果て、どこを見ても当時
の面影はなく、ただ戦闘のすさまじさを物語っている。「この
海岸から米軍が上陸し血で海は真赤に染まったのです……」と
ガイドの説明を聞きながら、今は平和の波が打ち寄せている砂
浜を踏みしめたとき、或いはまた、自ら死を選んでとび込んで
行ったバンザイ岬の断崖に立ちながら、往時を偲びただ感無量
であった。転進地ヤップ島においても飛行場附近の零戦機や高
射砲陣地に残る傷跡は、当時空襲のし烈さが頭によみがえる。
同時に、私達が駐屯していたマッピ島は今も変わらぬ風情やた
住いに海辺は雄大なる椰子林、ハイビスカス、浜木綿の可憐な
花など三十数年前と少しも変わらぬ風景を見ることが出来ると
も懐かしかった。遙かにおしよせるリーフの波の音や風にゆら
ぐ椰子の葉ずれの響を耳にしていると、当時の思い出がまざま
ざとよみ返って来る。この度マッピ島民たちも私達を気持ちよ
く迎えてくれ、現地での慰霊碑の建立と合同慰霊祭は、なき戦
友の安らかに眠って下さいという思いで訪れた戦友。また島民
代表はふんどし姿で焼香に涙し、また力強くも胸のあつくなる
追悼の言葉に、ありし日の面影を浮かべながら全員で「海行か
ば」の合唱に、地下の友も喜び共に歌ってくれたものと思われ
る。翌日の夕べ島民踊りの接待を受け、椰子の葉シートで暁を
覚えた一夜は巡拝の印象を深めた一コマであった。今やヤップ、

コロニー港の造成や道の整備など開発が進められているがミックロネシヤ観光の一環としてクローズアップする日も近かるう。慰霊碑が末永く維持保存されることを祈りながらまたの訪問の日を楽しみにしている。(昭和五十五年三月記)



昭和六十一年四月ヤップ島よりジョン、タマグロン村長たち三人が玉野市を訪れカヌーを組立て渋川海岸で進水式を行う。そのときヤップ会のメンバーを交え「乾杯」、カヌーの安全を祈る。同年七月父島まで大型カヌー「ペサウ号」で三〇〇〇キロメートル。その後は客船にて十日に来日。十一日岡山ヤップ会と奥市遺族会館にてガヤン氏外十名の来岡者に、会員百名余り集合し大歓迎会を開催致した。

昭和六十三年六月二十九日ガヤン・息子フランクサラガン・現酋長一行は元軍医さん宅へ来日。瀬戸大橋の渡り初めと東京見物を予定。又彼らは岡山にヤップの文化や民俗を紹介する「ヤップ館」なるものの建設を希望している。親交を深めるよい方策ではありませんか。平成四年二月「島の文化の変容を描く」と題してOHK放映。老酋長ガヤンの伝説でミックロネシヤのカヌーとマンダの海、ヤップ島を舞台にしたユニークなドキュメンタリー番組として上映される大内青琥さん(十年余りヤップ島に滞在)の参加してのカヌー作りなどである。以来島との交流は続いている。

邑久の農業 農家の立場から

太田 保 (八十歳)

北島一九二 農業

資料が無いので真実に近づくためには五十年の記憶は遠い。

従って体験記、すなわち私事になるがりとようとされたい。私は次男だったから農家を継ぐ必要はなかったが、兄の抑留が二年半に及んだので、留守を守らねばならなかった。そのころは何もかも不足で衣料、日用品に至るまで統制され主食である米は特に厳しかった。政府は過酷な割当てで農家から米を供出させた。耕作面積の多い農家程厳しく困った。一策として田を売りに出す家が増えた。その田畑を私は二反余買った。まだ買って呉れと話をもちかけられたが断った。やっと兄が帰郷。二反余の田と古家を貰って分家し農家となった。以来徐々に増反して田畑で一町歩程にした。私は終戦時内地にいたので兵役を解かれ昭和二十年九月人の目を避けながら帰郷した。

○追加供出について

十九年産米の部落責任による部落への追加供出割当てがきたのである。当時農業を営んでおられた人には想い出して頂ける

と思う。帰郷間もない私は、部落農家組合の生産部の役を急に持ってこられ苦勞が始まる。

それまでに何度追加割当てがあったのかわからないが、数俵(何俵だったか記憶にない)の割当て、約三十戸の農家から出さねばならない。どこの農家も余剰米はない筈である。組合長、副組合長等の指示に従って、あの家からは一斗あの宅からは五升あそこは無理だろうという様に各戸への割当ての計算、やり直し、又計算と私ら部員は連続計算をさせられた。耕作反別保有人口等で算出すれば簡単だろうが、そうはできない理由があったのだろう。なかなか割当てが確保出来ず徹夜を含めて一週間を要した。終わって私は三十九度の発熱で床に就いた。完納出来なかった部落には強権が発動され食糧検査員による家捜しがあり摘発されたそうである。我が部落では代替(芋類とか南京等)を含めて完納出来たので強権の発動はなかった。大根の種子を煮て食べたなら美味しかったといった農家もあった。私宅では弟は戦死していたが、兄が何時帰っても良いように一人分の保有は認められていた。それでもその米には手がつけられず粥食、南京食の日もあり満腹には程遠かった。国民一人が米一粒節約すれば二十七俵節約になると報道されたくらいである。

○大洪水

米不足に追い打ちをかけたように九月には今の備前大橋北の

東堤防の決壊による大洪水である。私は警鐘台に登って見た。大窪の上を白波が筋になって南進するのが見られ、大急ぎで家具等の片付けを始めたが、水量はどんどん増え台を乗せた家具も結局水没。古い藁葺き農家は軒までつかった。大海原に屋根だけ点在している風景だ。その間を木材やら色んな物が流れ、牛がモウモウと鳴きながら流されて行くのを見た人もあった。その濁流の底の方で開花が終わって間もない稲が何日も沈んでいたのである。更に十月の洪水と続いた。増産を夢見て牛の尻を叩きながら田を起こし、田植え、田草取りと働き盛りの男のいない田を守っていた老人、婦人、子供の、汗水流した苦労は消え去ってしまい、情なかつただろうと想像できる。私の倉に保管されていた政府米も最上段の一俵通りを除いて他は全部水に浸かっていた。この米は旧福田村（記憶が薄い。）に割当てられたらしく水が引いたところ全部持ち去られた。浸かった俵はカンカンに膨れ異臭を放っていた。持ち帰った人は干して精米して食べたのだろう。お蔭で倉の板は落ちてしまっていた。昭和二十年は敗戦、大洪水二回、十二月の地震と最悪の年だった。

○水田裏作

昭和三十六年より部落の同志と一六会を創り水田裏作に野菜栽培に取り組み、私は大型ビニールハウス約一反（胡瓜、茄子、

トマト）春出し白菜（小型トンネル）甘藍（キャベツのこと）を十数年間続けた。諸物価はドンドン高くなるが野菜は始めたころと変わらない。一寸空豆、砂糖大根も手掛けたが疲れを残しただけ。以後ビール麦に転換したが毎年のように価額は下落を辿る。

○私見的を外れているかも知れない。

テレビ等で見ると借金して田を買って大型農業にしている家では、利子補給に追われている。請負耕作で成功している農家もあるようだが地域によって差がある。大型にしてもコスト低減には限界があり、美味い輸入米が豊富に入ってくれば、今の米価は何時までも維持出来ないのではないか。私は大型化に疑問を抱いている。

○依頼者へ提言

邑久町内でも請負耕作が大なり小なり進んでいる。請負っている人も高齢に近い。過渡的な請負者が多いのではないか、後継者があれば良いが、いなければ何年後には田が返ってくるだろう。そのときどうするか、更に請負ってくれる人があれば良い。無かったら自分で管理しなくてはなるまい。だから依頼したからと農具を手放してしまっていたら、そのとき多くの投資が必要となる。故に依頼後も時折手入れをしながらトラクター・コンバインは保管しておく必要があるのではないかと思う。

○私の残したもの

私等夫婦で苦勞して得た田畑は息子に二種兼業の余分な負担を、孫には嫁取りの邪魔になる厄介物を残した事になると思う昨今である。

被爆五十周年

大森 ヨ シ エ (七十七歳)

山手一四三七番地

被爆五十周年、長い道のりだった。原爆手帳を大事に五十年生き延びた私には歳月にかかわりなく、目を閉じれば原爆砂漠。一瞬に瓦礫の山と化したまさに地獄絵図。そして瓦礫の下から「お母ちゃん助けて！助けて」の幾重にも重なり合う声が耳朶を打つ。

昭和二十年八月六日、塵埃と黒煙の中で見た太陽の異様なまでの赤さが忘れられない。一瞬にして何十万という人間の血を吸った赤さ、あれはまさしく血の彩りだと心で叫んだ。ピカッと光り、ドーンと鳴ったからピカドンと呼んでいるが、私の目の前で突然爆発、強い白光の火花、激しい爆風、ピカリもどーんもない、すべてあつという一瞬の出来ごと、真っ暗い中をざ

あーバラバラと校舎の崩れる音、背なに落ちかかるのを無意識に手で払いのけようと、二三回繰り返したが気力がもう無かった。

私の名前を呼ぶ声にふっと我にかえった私はここよと叫んでも声にならない。その朝通勤電車に乗り合わせて一緒に校舎の裏門に入り、建物に沿って二・三米歩いたとき突然の爆弾の炸裂、彼女山本さんはその女学院の二年生、女子挺身隊として私達の課へ配属、私と席を並べていた。広島鉄道局審査課、その本庁は宇品にある。宇品は軍港であり陸軍の重要な建物があり、それらを守るため鉄道局も直接列車を運行するに必要な課のみ残して、ほかは一切疎開せよの命令、女子職員が多いのと課として多人数であるため受け入れて貰える所が無かった。挺身隊のご縁で急きょ女学院の空き校舎一棟を借りて移転した。繁華街を離れていると言っても街中への移転には反対もあったが、取りこわしが始まるというので止むなく強行。一番に決めたことは空襲を受けたときの逃げ道の詮索であった。

男子職員は主任さんだけ、銃後を守る決意を新たに、胸に義のマークをつけ、仕事の合間を見ては教練を受け、ある時は用品から戦地へ出征される部隊の小休止に、早朝でも駆けつけてお茶の接待をした。誰ひとり嫌な顔する者もなく、一杯のお茶で心をうるおして貰い祈りながら出征を見送った。宇品を離れ

ると何か急迫した気配を感じながらの電車通勤となった。

「ヒロシマ」は軍の命令がよく行き届いている。特別な爆弾を使用する。八月五日に爆撃すると言う噂が流れた。その八月五日は何事も無く終わった。やはり単なる流言飛語かと片づけた。その翌日の六日朝、B29一機が飛来、空襲警報に緊張した。が何事もなく解除、通勤の支度に替えての出勤、防空頭巾と避難袋を肩に掛けた。八時十五分、一瞬に地獄絵図と化しヒロシマが消えた。あの強烈な白光に目をやられたと思ったが、目に痛みがない、おそろおそろ目を開けるとおぼろげながら見える。もうもうと立ちこめる塵埃じんあいにうす暗くなり、屋敷街だった姿はどこにも無い。瓦礫がれきの山で道もない。僅かに屋敷だった面影を語る松の木が点々とたおれかけている。瓦礫の中から這い出して互いに無事を確かめ合って、涙ながらに連れて逃げてよと懇願する彼女に「大丈夫よ」と固く握り返す私、日の当たったところは忽ち水ぶくれとなり、彼女の左腕から手首まで一直線の水泡、潰つぶしてはいけないと決意しても腕をおおう一切れの布もない。飛ばされた時身につけていたものは腕時計までもなくなり、上衣のボタンは取れ、ストラックスは脇の縫い目がさけている。が上下とも身にまわっているのが逃げる途中、何度か上衣を下さい、ズボンを下さいと懇願されたが、重ね着してないので私は首を横にふりながら足早に去った。右往左往する人、

人の群れ、僅かに布らしいものをまとっている女の、パーマの髪が総立ちになり角が無いから鬼ではないとすすけた顔に眼が光る。私の顔どうなっていますかと尋ねる娘さん、額から一すじの血、大丈夫ですよと言ったものの顔半分の変色はすすけただけではないと思っただが、力づける言葉しか無い。片々ながら下駄を拾い彼女も私も裸足を救われ瓦礫を踏みしめていると一団の人々とすれ違う。駄目よと両手でさえぎられ見ると前方は黒煙の固まり、回れ右して走りかけるとまた別の団体、この先はもう火の手が回り逃げられませんよ、もうもう上がる黒煙に炎が見えて足がすくんで動けない。七・八歳の子供が群れに遅れまいと小走りしてもすぐ遅れてはまた走る。その繰り返しに見れば踵かかとにポロ切れをひきずつている。その為の遅れかと私は足で踏んで取りのけようと近づき、踏んだがするりと抜けて取れなかった。あとでそれは足裏の皮がむけて汚れ、ポロ切れに見えたものと聞いたとき、ぞっと寒気がして取れなかったこととほっとした。痛いとも言わず皮のむけた素足で逃げるのに一生懸命だった姿、おじいさんがこの下にいますと言っても、家の下敷きではどうにもならず誰も足を止めない。うつろな目のおばあさん、僅かに手が覗のぞいて引っ張ればするりと抜けそうに思わず足を止めると、挟くわまれていたので駄目です。早く逃げて下さいと逆に声をかけられて、心を残しながら立ち去ったが、

傍でうずくまっっているおばあさんに声を掛け誘っても動かなかった。どこをどう逃げたか気付いたとき練兵場へ辿り着いていた。日が暮れたその一隅で死体を焼いている。真っ赤な炎、影絵のように一体、また一体と火の海に投げ込まれる光景も鮮やかに瞼に焼きついている。

明日はどうなるのかと思うことすら忘れて、点々と横たわっている動けない人々の間を縫いながら茫然となる私、戸坂の陸軍病院へ行って治療うけますと言って別れた山本さん、その後の消息は判らない。

原爆症で三カ月近く生死をさまよい、老父と自分達も被災しながらも私と弟の二人を看病してくれた妹夫婦の三人のお陰で、命拾いをした。

広島から岡山へそして邑久町へ住むようになって長い間、西大寺被爆者の会に所属していろいろとお世話になっている。互いに励まし合い、助け合う五十年の道のりは長くつらかった。

眼を閉じるまで続くわたしの原爆砂漠

八月六日は終りなき日の鎮魂譜

シベリア抑留記

神坂 満 (八十四歳)

尻海二九〇六

戦争は悲惨なものである。まして戦争が不利になった場合の悲惨さは言語に絶するものである。

五十年前の記念すべき八月十五日を私は満州の奉天で迎えた。暫く経って文宮屯という所でソ連軍のきびしい武装解除を受け、いよいよ身に寸鉄を帯びない毎日となり、それまでの部隊を再編成、一〇〇〇人単位の部隊に編成替えを行った。九月にはいて有蓋貨車に詰め込まれて自由行動は完全に拘束をうけ奉天駅より北上する。ソ連軍兵士の銃剣による警護の下に苦しい抑留生活の第一歩を踏み出す。

ソ連側の話では松花江沿岸の陣地設備を復旧した後、ウラジオより海路日本へ帰国せしめるという。奉天―ハルビン間の駅、駅で奥地開拓地から炎天下に拘らず無蓋車で同胞が何梯団(軍隊用語)も南下して来るのに出会う。乗車しているのは婦女子と子供ばかり。男子は根こそぎ動員で一人もおらない。国策と良いながら開拓地で宮々辛酸を舐め今は全く着のみ着のままの

憔悴^{しょうすい}した哀れな姿を見ると胸が痛む。ソ連兵の警護の銃剣におびえながら健気^{けんげい}に口々に兵隊さん元氣を出して下さいネと叫んだ。北上する我々もすでに囚われの身であってどうすることも出来ない。お互いに手を振って万感に胸をふるわせるだけであった。松花江沿岸黒河に着いたが陣地の復旧作業など行うこともなく、ただちに松花江を渡河してソ連領にはいつてしまった。有蓋貨車に詰め込まれた我々は、夜半に出発してシベリア鉄道を進み、夜が明けて見ると太陽を背にして西へ進んでいるではないか。ああ、そのときの我々の落胆はいかばかりであったか。ソ連側はウラジオより帰国と言う甘言をもって脱走を予防していたのだ。このこと以来我々はソ連側の言うことには全く信をおかないことになった。来る日も来る日も広漠たる原野を有蓋貨車に詰め込まれ、密閉された窮屈さの中で、我々は何の変哲もなく何日走っただろうか。およそ二十日間ぐらい走った地点で下車させられた。そこは寒村で鉾山であった。急造の粗末な収容所にはいる。翌日から早速三交替制で坑内作業に従事することになった。

坑内には工区長の外要所、要所にカザック人労働者が配置されて我々の指導にあたるのだ。我々は発破がかかった後工区長の指示で切羽^{せつぱ}にはいり鉾石（鉛）を搬出するのである。トロッコ大・一トン積み二人押し、小・〇・五トン一人押しである。

トロッコを押し切羽より漏斗^{ろうと}状の落し口まで二〇〇米ないし三〇〇米を押すのだが、いつも空腹状態の我々は、トロッコを押し切いて何度となくレールの枕木に躓^{つまず}いたりよろめいて、かろうじてトロッコを押し。栄養不足のため足があがっていないのである。作業出来高が出来ないときは食事の量が減らされる。食事は一日パン三五〇グラム、スープ一杯、肉類は滅多にはいらない、大抵はトマトの漬物がいっているだけ、砂糖十五グラムこの重労働に栄養不足は免れない。発破の数量が尠^{すく}ない時も、機械の故障があつてノルマが達成出来ない場合も、おおかまもなく食事は減量される。坑内で働くソ連側労働者に聞いてみたところ、配給量は我々と同じで日本人を差別しているということではなかった。苛烈^かな独ソ戦で辛じて勝利したもののソ連国内の疲弊がその極に達していたものと思われた。

さて二年目には初めて帰国の第一陣が出発した。全員色めき立ったが結局虚弱者と見られる約半数が選にはいった。残された半数の我々は鉾山をあとにアルマアタに移動した、アルマアタはカザフ共和国の首都である。こんどは建築作業で我々は専ら煉瓦^{れんが}積み、モルタル運搬である。四階、五階程度の建物で足場の上を重量物（一輪車使用）運搬は相当危険であり疲労する。坑内作業に比べると青空の下で健康的でよいのだがこれもまたよく腹がすく。収容所では作業に出ている留守に政治部の

将校が私物などを点検しているという。共産主義思想の洗脳の度合いを観察して、次の帰国の順番に影響するらしいと、お互いの間で専らの噂である。

收容所は大隊長が取り仕切っていてそれまで穩健、円満、平和に運営されてきたのだが、そのころハバロフスクで日本新聞というのが発行されて、ソ連型社会体制を賛美し作業ノルマの一五〇％〜二〇〇％完遂を煽動するなどの影響を受けた一部の民主運動積極分子が主導して、民主化デモや吊るし上げなどを繰返し收容所内は一変して疑心暗鬼、とげとげしく、陰鬱な空気がなってしまう。

その後第二次第三次の帰国者が出発したが、これらにも漏れた我々三〇〇名はカラカンドに移動した。当時我々の間に鳥も通わぬカンカンドと言われた評判の辺陬(片いなか)の地である。

既に滞ソ四年を越え一同望郷の念に胸をかきむしられ、更にもうひと冬を越えねばならぬかと暗澹たる気持ちである。帰国の情報は絶えず我々の間を駆けめぐる。それが希望的憶測に過ぎない根拠のないものと知りながらも、期待してはひと月ひと月がたつてゆく。十一月にはいつて待ちに待った帰国の命令が出てカラカンド出発の日を迎えたのである。收容所を回ることに六回、鉛鉱山、炭坑作業、建築作業を繰返し、労働の国という

この国には休息の日はなく絶えず作業ノルマにおびやかされながら苦役の四年数ヶ月は今終わった。

我々と同じくソ連全域に連行された旧日本軍は六十万人。強制労働に従事させられ酷寒、重労働、劣悪な給養に斃れて不帰の客となった者、実に五万余人。その人達の無念さを思えば理不尽なソ連の仕打ちに我々の悲憤の涙はやむことがない。ナホトカ岸壁にて高砂丸に乗船した日のことは忘れることが出来ない。

翌日舞鶴湾の岬の山、山の翠(山や草のもえぎ色)はそれまでの荒涼たる風景に慣れた目に染みて故国を実感した。

ここでちょっと触れておきたいのは冒頭八月十五日を奉天で迎えたことになっておりますが、昭和二十年六月、私は中支において作戦に参加中、内地沿岸防備の要員として内地へ帰還の命令を受け、途中北京にてソ連国境風雲急を告げ、急遽奉天の部隊に転入されることになったのです。数奇な運命に翻弄されて抑留の四年数ヶ月は余儀ない道草となってしまいました。

舞鶴港棧橋に上陸の第一歩を踏んで四十五年余の歳月が流れその間を想えば山あり谷あり長い道程、暖かい言葉をかけて、慰め、励まして下さった皆様にはどんなに力づけられたことか感謝の言葉もあります。今余生の日々を平穩安泰に送れることをこの上なく幸せに存じておる次第であります。

終戦の思い出

時 岡 弘 太 (七十歳)

豊安一七七 農業

あの日あの時

一首の歌が数十万の生命を救った

昭和二十年四月五日鹿兒島兵站^{たん}事務所で沖繩輸送業務に当たっていた私は、第十六方面軍司令部に転勤、参謀部勤務を命ぜられた。当時は福岡市の西部軍管区司令部内に、第六航空軍と共に同居していたが、米軍の空襲により被害を受けたので、以前から準備されていた横穴陣地に引越した。場所は福岡県筑紫郡山家村の山中であった。平素から横穴に入っていると身体をこわすので、山中に各班毎に三角兵舎を割当てられ、これが事務室であり、夜は机を寄せて毛布を敷き寝室となった。そして米軍が上陸と同時に決第六号作戦が発令され、横穴に入ることとなっていた。

当時中央部より決第六号作戦用弾薬燃料の割当があった。弾薬は一合戦分、燃料は一万二千匁でした。一合戦分の弾薬とは、銃一丁三百発、普通火砲一門四十発。重砲一門二十発。これを

基本数値として計算し総合して一合戦分という単位を作ってあった。米軍の上陸予想地点を宮崎平地から志布志湾と想定し、都市付近に第五十七軍を、川内市付近に第五十六軍を、唐津市付近に第四十軍を配していた。第十六方面軍は固有隊号であり一般には陸第一三五〇〇部隊と呼び、防諜^{ちやう}上の理由により鎮西集団とも言った。一般に集団は軍司令部であり、兵団は師団司令部であった。

やがて激戦であった沖繩戦も終わり、今度は九州の番だということは誰も知っていた。そして懸命の作戦準備が日に夜を次いで進められた。

八月十日ころだったと思う。日本がポツダム宣言を受諾しそうだという情報が伝わってきた。私はデマであろうと一笑に付したが第六航空軍と第五航艦では、中央部の弱腰に腹を立て、共同で沖繩の米軍攻撃計画を立てているとの情報が伝わり、大変なことになったと心配した。後から聞いたことだが、八月十四日は雨、十五日に終戦となった。第六航空軍は計画を破棄したが、第五航艦は艦爆すい星十一機が大分基地から飛び立って、其^そのまま帰っては来なかったそうである。

八月十五日重大放送があるので全員聞くようにとの連絡があった。事務室に入りたばこに火をつけると連絡があり敗戦を

知った。建国以来負けることを知らなかった帝国も敵の軍門に降らなければならぬ。しかしながら我らはまだよい。皇國の勝利を信じて華と散った英靈に我らは何と答えれば良いのか、私の両眼からは熱いものがとめども無く流れ頬を伝わった。

明けて八月十六日前記の航空隊の話に刺激されたのか、青年将校の中に徹底抗戦を叫ぶものがあつた。そうして日が経つにつれてその声は大きくなつた。日本は降伏するとも、第十六方面軍は独立して皇國護持のため戦い続けるという。軍司令官横山勇中将は各参謀とともに会議を重ねた。色々の意見が出尽くした後、和、戦どちらの道を選ぶか決断のときが迫つた。そのとき司令官が一首の歌を詠まれた。

詔勅なら

いともかしこし百万の

御軍たばね

戈を収めん

この歌によって第十六方面軍は終戦と決定した。今思えば、徹底抗戦の道を選んでいたら、数十万の生命は消えていたであらう。司令官の詠まれた此の歌は、軍隊のことが頭の中で風化されて行く中で五十年の風化に耐えて、一言も風化されること無く今もってはっきりと覚えてゐる。

終戦後は武装解除も無く忙しい毎日でした。八月十七日電報

班より一通の電報を受け取つた。発信は中央部で、受信は第十六方面軍参謀長であつた。内容は軍事機密であり取り扱いは用済焼却と朱書してあつた。内容を読んでいくうちにそのことの重大さに私の胸は震えた。

一、御親影は嚴重に秘匿すべし

二、兵器は軍備再編を考慮し出来得る限り秘匿すべし

私は電報を台紙に乗せ取扱者としての印鑑を押して参謀室に走つた。今村中佐に押印して頂き、高級参謀種田大佐の押印を頂き特にお願ひして参謀長、参謀副長の押印を頂いた。種田大佐が電報を持って参謀長室に消えて約十分間で終わった。私は電報を受け取ると副官部に走つた。庶務の将校にお願ひして司令官の押印を頼んだ。内容を読んでいる庶務将校の手が震えていたのを忘れない。押印が終つた電報を受取り、私は事務室に歸つた。佐々木少佐、安楽大尉の押印を済ませ、佐々木少佐の指示により焼却処分した。二日後兵器秘匿班が編成された。私の班から中沢曹長が参加した。そして本格的な秘匿作業が開始された。其の内容は防空のため掘られた横穴に兵器を詰めて入口を塞ぐというもので、秘密作業のため、それ以上のことは係外は誰も知らない。マッカーサー司令部より電報が入るようになり、色々な報告書を提出するよう求められた。一例を挙げると、九州全地区で備砲の場所、数量、砲種、口径、最大射程、左右

の角度等提出期限に間に合わせるべく不眠不休の日が幾度かあった。

九月十日ころだったと思う。一人の米軍MPがどこで聞き出したのか山の中に入って来た。一番近い所が参謀室なので参謀室に入った。昼食のため、部屋には誰もいなかったが、隣の庶務室から下士官が見ていた。MPは部屋に入ると先ず机の引出しを引いた。そこには拳銃があった。驚いたMPは弾倉を抜くと実包が入っていた。MPは拳銃を机の上に投げ出して逃げ帰ったと連絡があった。恐らく武装解除は終わっていると思っただのが、実包の入った武器があったので逃げ帰ったのだろう。恐らく明日は多勢で来るだろう。機密書類は焼却せよという連絡が入った。穴を掘り書類を入れガソリンをかけて火をつけても、書類は中々燃え尽きない。夜を徹して焼却作業は続けられた。

一夜明けて武装解除をしていないことを知ったMPは、十五名と情報将校五名、通訳三名でやって来た。拳銃を構えたMPを先頭に入って来て、書類を全部机の上に出しなさいと言った。提出すると所々めくっては読んでいたが「この書類は焼いてはいけない。持出してもいけない」と言って次の班に出て行った。終わったので時計を見ると正午であった。将校は食事に出て行き、事務所には私と今中伍兵、兵二名と筆生と呼ぶ女事務員が

五名残っていた。十分位経ったであろうか、一振の軍刀を持ったMPが私の机の前に来て、立ち上がった私の胸に拳銃をつきつけた。カチッと音がした。安全装置を外したのだ。そうして何か早口で言っているが、英語を知らない私には通用しない。私は覚悟を決めて、平然と大きな声で「何を言っとるかさっぱり判らん」と言った。すると左手に持っていた軍刀を私の目の先に出して、イエス、ノーを繰返した。私は始めて軍刀があるか、無いか聞いていると判断し「ノー」と答えた。「ノー」彼は復唱した。私は大きくうなずくと彼は拳銃を私の胸から外して出て行った。筆生の顔色が心なしか青ざめて見えた。そして背後の刀架を見ると、全員の軍刀が立ててあった。あわてていたMPはこの軍刀が目に入らなかったであろう。それにしても幸だった。私は軍刀を早く秘匿するよう全員に命じて部屋を出て、他の班の様子を調べた。本格的な復員業務も終わり十一月四日故郷に帰った。二度と相見ることはいないと思っていた故郷の山々が、肉親が、温かく迎えてくれた。

思えば終戦以来五十年、頭の中の記憶も順次風化して、細かい事は忘れ去り、はっきりと覚えている事をそのまま書き連ねた。太平洋戦争に於ける軍官民の犠牲者は合わせて三百十万人といわれます。今日の平和はこの三百十万人の流された赤き血潮の上に建てられていることを、忘れること無く、二度と戦争

を起こしてはならないことを、今更のごとく心中堅く誓うとともに犠牲になられた方々の御霊安かれと、その御冥福を祈りながらペンを置く。

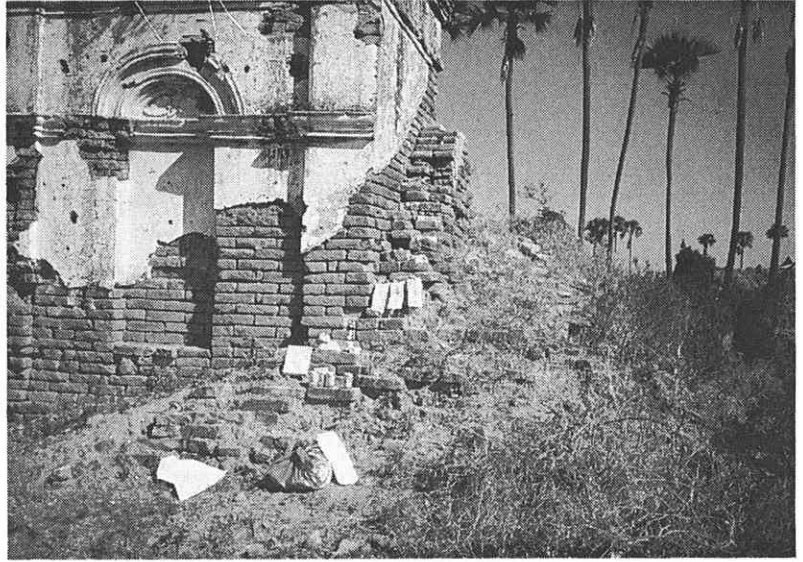
ビルマ戦塵

木村 一（七十五歳）

大窪宮の本四三五

支那事変も日々に拡大していった。昭和十六年兵庫県加古郡神野村西条の地に、中部第六部隊歩兵第百六連隊が誕生した。私達は入隊、やがて大東亜戦争が勃発した。昭和十八年も暮れようとするころ、朝鮮竜山に軍旗と共に移動した。明けて十九年初夏、第四九師団に編入された。そして一番遠くの戦場ビルマへ。昭和二〇年、この年のお正月はペグーで迎え灼熱の中、形ばかりのもちつき、マンゴーの木の下での日本のお正月を偲んだ。明けて二〇年三月、中部ビルマの要衝、メイクテラ奪回作戦に参加する。自動車部隊もペグーに集結出撃。この世に生を受け、ヘソの緒を切つて初めての实战（私の属した二大隊は、師団直轄）ビルマの太陽は赤くやけて夕日が西原に傾きか

けたころ、我が莫大隊はトングーというかなりきれいな街に入れた。いきなり戦闘機の銃撃を受け、その炸裂の凄さと、十三ミリ機銃の物凄さに初体験の私達は下肝を抜かれた。青くなっていたに相違ない、トングーを後に我が二大隊の車両は何時間も北上を続け、ペウベエーという街についたが、トングーとはがらりと状況が変わっていた。風は生々しく感じ、いよいよ戦場の第一線。転ぶように下車。遙か北方はメイクテラ。青い閃光、体中のふるえがどうしても止まらなかった。しかし、私人ではあるまい。死に物狂いで前進。夜も白んでくるようであった。ミヤという小部落に辿りつく。この部落が私達二大隊最初の戦闘の地。陣地とは名ばかり、空からも地上からも丸見え。こんな所で戦争ができるのかと思った。もう二日は寝ていない。死に物狂いで自分の入れるだけの穴を掘ろうとしたが目はくらみ、息は切れ、疲れ果て、ビルマの土は硬かった。やがて朝がきた。胸のつまるような数時間が流れた。果して北方に砂煙り。誰しも一瞬息の止まる思いであろう。唸りをあげながらマンガレー街道を南下して来た。ミヤで初めて見る敵軍の戦車群、戦車だけでも一五両位いただろう。いつの間にも据え付けていたか友軍の山砲が轟然火蓋を切った、あまり近くの発射でびっくりした。一斉に銃声と砲声が続き猛烈な戦闘が始まった。数時間流れミヤの周辺にも夕闇が近づき、英印軍は一斉に引揚げ



ミヤの激戦地

英軍戦車の蹂躪を受ける 後方のヤシの木に今だ弾混残る

昭和57年1月11日写す

始めた。実に長かった。ホットしたが戦闘の後のミヤは戦い前とはまるで違い、その辺一面が火の海と化し、凄惨たる状況であった。その戦いだけで我が方の戦死傷者は凄惨たる状況であった。我々は大きな抵抗とてできず、毎日がただ前進するだけ。次から次へと戦死者が増えるばかりで、我が軍の戦車航空機の姿は見え

頼みの砲さえも少なくなってゆく。三月末頃我が二大隊はトーマ飛行場の一角まで行ったが、毎日たたかれ叩かれ、敗色は私達にもはっきりと分かってきた。我が陣地より発射される友軍の砲。重機等の発射音も日を追うにつれ、動きが止まってしまうように思えた。ジリ貧がきた。三月下旬いよいよ退くときが来たようだ。私達は夜間の長い行動が多かったせいか、全く暗闇でもある程度の行動ができたように思えた。しかし、どの辺を歩いたかは見当がつかなかったが、メイクテラーに通ずる鉄道線路を横切ったのはいまだにおぼえている。食べるものもなく戦闘準備どころか、歩くだけがやっと、立つだけが精一杯。イントウーは数日前友軍が激しく戦った激戦地。凄惨なところであった。やがて夜は明けた。残り少なくなった我が大隊は、地獄の一日であった。やがて夕日は赤く燃えながら西に傾いた。転進マンダレ街道を横切り、大隊長以下あえぎ喘ぎながら、砂地の多いキャツウインカラという小さな部落に入りこんだ。タコ壺を掘る気力とてなく、もうどうでもなれとひっくり返った。食糧はもとより弾薬等が目に見えて少なくなっていたのもどうすることも出来ず、これで明日どうするのかと哀れさを感じた。幸いこの村は一面が砂地で戦車はよう侵入してこなかったが、迫撃砲、戦車砲、空からの銃爆撃は激しく何回目かの迫撃砲の集中攻撃で寛大隊長を遂に失い、菅野曹長(岡山)外多くを失っ

た。大隊副官伊藤少尉と共に、夕暮れを待ちパコタ辺に集結。大隊長を失った名ばかりの大隊は、闇に乗じ逃げるようにフラフラと、ようやく体を支えながら、キャツウインの村を出た。その間、一滴の水すら呑むこともできず、わずかに生き残った大隊本部各中隊は、急に浮き足立ってきた。もうこうなれば戦争する力はない。やがてマダレー街道に出た。小高い丘にお寺ときれいなパコダのある台上に辿りついた。この地こそが私達生存者最後の戦いの地、サダンである。四月八日夜も明けようとしていた。私の仕事は弾薬の補充、兵器等の仕事であった。ようやくにして辿りついたサダン、どこに弾があるのか誰から弾薬を受け、又あるのかないのか走り回った。やがて夜は白々と明け、ようやく小銃弾、重機の弾薬等をパコダを背にして分け合った。間もなく英印軍はこの地めがけ必ず攻撃してくるに違いない。数時間、果してイントー方面に白煙を上げ南下して来る。いよいよ来たと思ったが、タコツボどころかその辺サボテンが多かったがなんの役にも立ちそうにない。アツという間もなかった。はや一部はサダン台上めざし進入して来た。もうどうすることもできない。思いついたのがこのパコダ半回転回ったところに入口があった。天の助けと思ひ、とっさにパコダの中に潜んでいようと鉄板で造られた小さな扉を少々押ししても開こうとしなかったが、誰かが中にいるようである。いきなり大



サダンの村パコダ
戦車砲の弾混も生々しく
昭和57年1月11日写す

声が出た。開けてくれー中を見るなりびっくりした。十二・三人いた。もう一人として入れそうになかった。むりやり割り込んだが、すぐに全員外に出て戦闘隊形を取った。二分程が長いように思えた。きた、カン高いエンジン音、キャタピラのぎゅーという音、サダン台上めざして襲撃に移って来た。物凄い機銃

砲火、私達の中に、もう重傷者、戦死者が出た。二度パコダに飛び込んだ。その直後中央辺に戦車砲一発、一瞬にして土煙。少々間をおいてもう一発。これはこたえた。パコダは揺れ動いた。天井に割れ目。今にも崩れるか、爆風で鉄板の扉は開いた。何人かが転げるように飛び出た。待ちかまえた戦車からの機銃掃射。パコダの中からの目前で、あの生々しさは一生脳裏から離れることはない。さらにもう一発、呼吸の止まる思いであった。パコダに残った六名位、見残されていた。その中の暑さは人間の生きられるような暑さでないことに気付いた。身体中に水分が全くないように思えた。パコダの横の寺院も燃えていた。サダンの村もやがて夕暮れが迫ってくる。英印軍は戦車と共に北方に撤退したのか、静かになった。あたりはうっすらとサダン台上を夕闇が包みかけている。戦場は悲惨である。このサダンの戦場で歩兵第百六連隊に合流することができたのであるが、一大隊、三大隊も、壊滅の状態であり、又このサダンの戦場で歩兵第百六連隊長も遂に戦死される。台上に夕陽の沈むころ、私達の部隊は玉砕を待つのみであった。かくてビルマ方面軍と我が連隊はビルマ街道を英印軍の機動部隊を阻止することとはできなかった。ビルマ街道は通れず、あの野戦を退却。やがて五月からは、ビルマ特有の雨期がやって来た。中部から南部にと転進を続ける私達の頭上に、容赦なく降りそそぐ。その

間ビルマ義勇軍は反乱を起こした。これらの戦火も受けながら、ようやくトンギーモチ街道の一角に辿り着くのであるが、パプン峠と名付けられた街道であったが、いつしか白骨峠と化してゆく。シツタン河の上流と見られる高原のどこかを南へ南へと夜間の転進が多かった。夢中に歩いた。中部メイクターラより遙か南の地にあるモールメイン。タトンの辺、ワバという小部落カレン族と何十日を共にした。敗れた私達であるが、カレン族の心は暖かく人間らしさをとりもどすことができたが、冷たい雨の降りしきる八月十五日夜中ごろ、遂に太平洋戦争は終わった。異国での労役は屈辱と苦痛と、あの暑さにさいなまれ、生涯忘れようとしても忘れられぬ思い出となった。

―回想断片―

○ 当時南方での通り文句。ジャワ極楽、スマトラ天国。ビルマの生地獄、生きて帰れぬニューギニア。

○ 故国を遠く離れての終戦後は、パヤジー収容所を振り出しに、プローム、ミンガラドン、その他を転々。二年間の虜内生活。

○ 昭和二十二年初秋、宇品港に上陸、日本国に一步踏み入れた。

○ ビルマ方面に出戦前、呉軍港内で初めて見る、戦艦大和、武蔵、長門、金剛、それに巡洋艦と巨大艦が揃い歩兵第百六連

隊は巨大な戦艦に移乗する。我々二大隊約一〇〇〇名は、武威である。赤道下のリングガ島に着く。昭南島、サイゴン、プノンペン、バンコック、泰面鉄道。ビルマへ

○ 昭和五十七年一月十一日、第二回ビルマ巡拝団に参加することができた。われわれもどうせ最後はビルマの土になることであろうと思っていた。

○ 昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発真珠湾攻撃、マレー半島上陸。

○ 昭和十七年三月二日、ビルマ進駐

○ 昭和十七年三月八日、ビマルラングーン占領

○ 昭和十八年八月一日、日本ビルマ同盟ビルマ独立宣言。

○ 昭和十九年四月六日、インパール作戦コヒマ占領。

○ 昭和十九年八月四日、北ビルマ、ミートキナー方面全滅。

○ 昭和十九年九月二十日、ビルマ雲南方面全滅。

○ 昭和二十年三月一日、中部ビルマ奪回作戦。

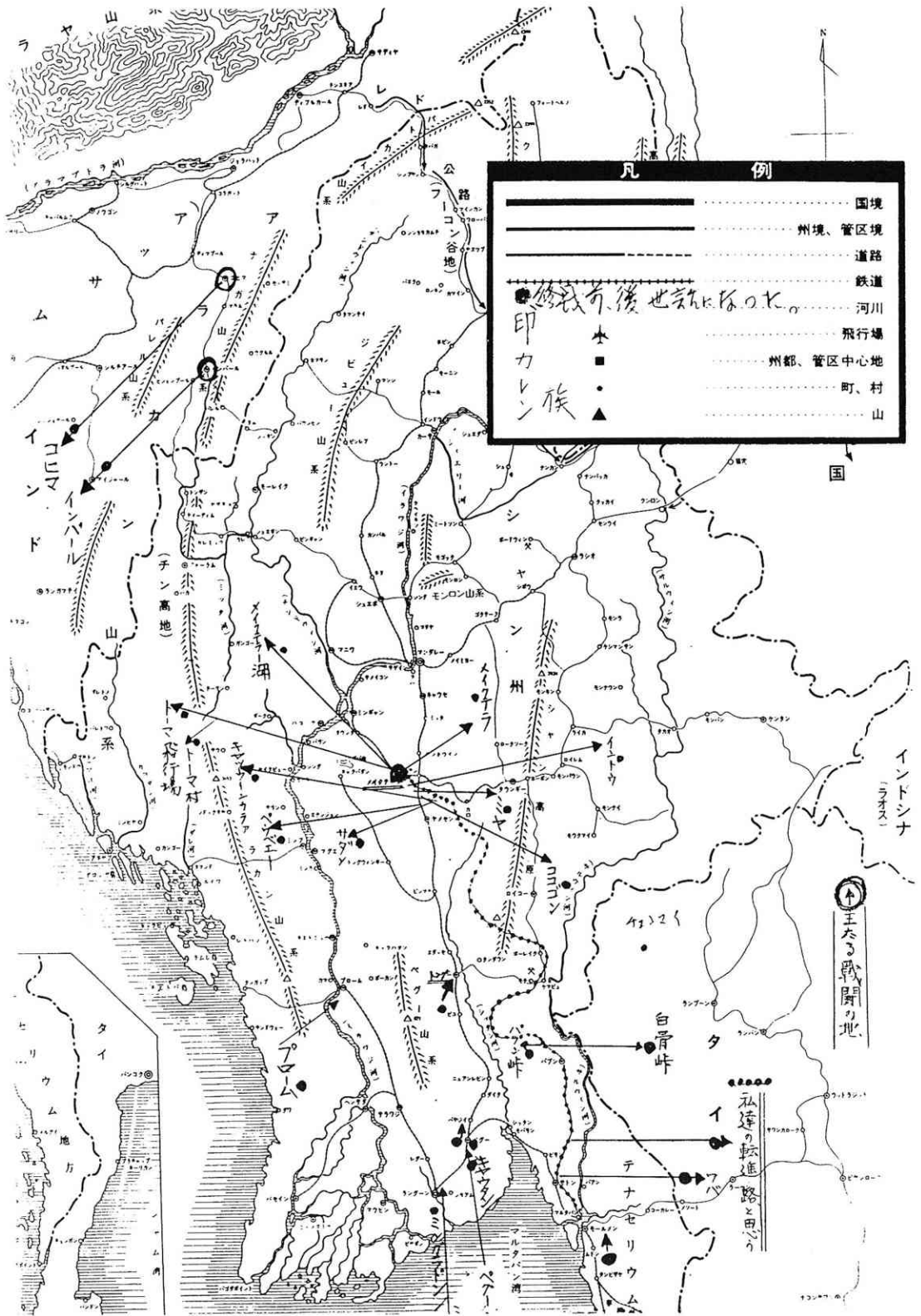
○ 昭和二十年四月末日、ビルマ方面軍壊滅。

○ 三十万人もの日本人が五十年ほど前にこのビルマにやってきたと言ったら、いまの日本人は信じるだろうか。ビルマ全土の地図と、私達が戦った中部ビルマ方面をわかりやすいようにと、↑印をしておきました。

○ もう一つはビルマ民族の人達。

ビルマの民族





岩国大空襲

是 信 弘 (七十二歳)

尾張六四一一一

七月上旬、もはや、水島工業地帯は空爆で壊滅し防衛の必要はなくなった。我々連島砲台は本土決戦に備えて、海軍最大の発進基地・岩国海軍航空隊防備の命を受けた。

水島駅より貨車に積み込んだ連島砲台の兵器と一緒に七月上旬の暑い日だった。お世話になった皆さんに別れを告げ呉線回りで岩国へ、途中呉は空襲の真最中、止むなく呉駅手前のトンネルの中で待機する。敵機が去った後、一路岩国へ、水島を早朝出発したが、岩国駅に着いたのは夕方であった。

翌朝、横田隊長他数人と岩空本部に挨拶あいさつに同行する。さっそく、砲台構築の場所を駅の南、岩国東国民学校の隣接地に決定し、砲のえん帯壕の構築作業を始めた。盛土は駅の石炭ガラで耐久強度は0に等しいが、そんなことは言ってもらえない気休めの囲いだ、昼夜兼行で各砲毎に頑張る。

私は測距の兵員と指揮所、主計科員を集めて岩空より応援に来てくれたトラックをフルに活用して、測距儀と隣に指揮所のえん帯をいち早く完成させた。

隊長が、ありがとう、これで何時敵機が来ても指揮がとれると小踊りして喜んだことを今もハッキリ覚えている。

七月下旬ころより毎日のように、グラマンF6F、双胴のP38ロッキードライトニングが偵察に、機銃掃射に暇がない。

八月六日早朝訓練中、ピカッ、と不気味な閃光せんこうが走りドーンという大音響で東方に測距儀を旋回すると、ムクムクと大きな茸雲きのこが視野に入る。——伝令がいきわ甲高い声で、「広島に原子爆弾投下」このときは一瞬血の気が去った。——数時間後、罹災者が無蓋車がいに鈴なりとなって岩国駅に着く。男女の区別はできなく頭髮はザンバラ髪で両手は下げたまま蜘蛛くの巣くもの身に纏まとったように黒くベラベラと垂れ下がった顔、皮膚、問いにも無言でただ頷うなずくだけである。貨車から降ろすにも焼け爛ただれてさわるころがない。

頑張れ頑張れと懸命に励ましながらトラックに乗せ岩国海軍病院に運ぶ。言語に絶する悲惨なものであった。

八月十三日、お盆である。私も少年時代父を亡くしているの
で、この日は郷里に向かつて心から遙と拝うやまつし無事を報告した。——
このとき隊長が私に「今日は盆だ。先祖の祭りだよ。俺の家は
寺だから」と話しかけてきた。

戦況も思わしくなく、ここは内地といえども発進基地である。私も鈴谷当時にソロモン海戦、南太平洋海戦等を体験している

ので運命共同体の一員として、明日の命の分からないことは十分承知していた。

そこで隊長に、倉敷から来てまだ一日も休んだ日はない。皆よく頑張ったので慰安会をしようと言ったところ、ヨシ、やろうと即決。ちょうど私が当直下士だったので宿舎の学校教室に総員集合をかける。主計科に酒の肴さかなをくれといったものの酔っぱい、たくあんの輪切りだけ。私はドロクを造っている家を知っていたのでバケツに一杯準備し、後は航空燃料だ。少々砂糖を入れて水割にすれば結構飲める。久し振りの無礼講で盆の一夜を楽しく過ごした。

翌十四日、朝からカンカン照りで暑いが皆すがすがしい顔で日課手入を始める。隊長が隣の指揮所から、「夕べは良かったぜ又やろうぜ」と声をかける。

隊長は指揮所の上に踏ん張って立ち各砲側に「右三五度、高角四〇度、距離六〇〇〇、各砲打方始め、と訓練の最中、航空隊本部より「九州福岡上空をB29の大編隊東進中」の報が入る。

——福岡は爆撃されていない。防周地帯から岩国だと直感したので隊長に告げると、俺（学徒出身の少尉）は艦船も外地も体験していないので、「こゝは正念場だなヨシ」と言うなり座禅を組んで経文を唱えだした。——空襲警報のサイレンが鳴り響く……………。

隊長に来るぞと告げると、「対空戦闘配置に着け」……………測距ヨシ、一番砲ヨシ、二番砲、ヨシ、ヨシ、ヨシ、と甲高い伝令の声。

隊長が「測距たのむぜ」と私は間髪を容れず、この砲は有効射程は七〇〇米だから、編隊の一番機に照準を合わせて一斉に弾幕を張るように進言する。隊長は座禅したまゝうなずく。——緊張の一瞬……………そのとき、西方上空にキラキラと輝くB29の大編隊を測距儀で捕捉した。ヨシ、目盛手が一五〇〇〇、高度四五〇〇。ヨシ、一三〇〇〇、ヨシ、高四〇〇〇、ヨシ、一〇〇〇〇、ヨシ、高二五〇〇、伝令の声ははずむ。隊長に合図をすると隊長の「打ち方始め」で一斉に砲門は開いた。ドンドンドンドン急斉射で打ちまくった。測距儀では搭乗員がよく見える。B29とB25コンソリーデッドの編隊である。……………胴体の弾倉が左右に開き真黒い二五〇K爆弾を約二〇発位ずつ投下する。ちょうど万年筆のような形に見える。ザーッ、ザーッとそれが次第に丸いタドン形に変わる。まさしく我陣地を直撃だ。目盛手の（距離）二五〇〇の声に、この野郎やられてたまるか、その瞬間ザーザーと夕立を浴びているような騒音と同時に、ドンドンドンドンと地がゆれる。眼前は粉塵で視野はゼロ、……………ビュンビュンと炸裂弾の破片と石、鉄片、木材が吹き飛ぶ。色んな戦闘に参加したがこんなすごい空爆は

初めてだ。

隊長に視野0で測距不能と告げると、俺も何も見えんぞと叫びながらも「打て打て」……。河波の編隊による集中爆撃を受けたのか、各砲何発打ったのか定かではない。砲身は皆真赤に焼けている。……敵機が去り爆撃は終わった。粉煙が次第に消え視野が開けてくる。各砲は上空をさしているもの、横倒しになっているもの、かすかに砲口から白い煙りが立ち昇っているのが苛烈な砲撃の後を物語っている。——隣接の学校も、駅も周辺の建造物も皆倒壊し見渡す限りゴーストタウンで、光景は筆舌に尽くせない惨状である。駅には上り、下りの列車が退避していたので死傷者と泣き叫ぶ声で阿鼻叫喚のちまたと化した。——爆弾炸裂の後が直径三〇米位の無数の大きな池となり、牛、馬と共に犠牲者が浮かんでいて、まさに赤い血の池だ。引き寄せては空地に運んだ。——、若い母親が犠牲となった幼な子の顔を布切れで、そっと拭いていた姿は目に焼きついていて今も忘れられない。

総員集合をかけていたが行方不明者が多く、隊長も見当たらない。オイ西川兵長がやられている。伝令の森下、谷口、丸山もと次々に戦死者の名前が呼ばれる。——「オイ隊長がいたぞ」の声の方に行くと、倒れた家の屋根の上だ。「皆集まれ」……。綺麗な顔である。胸と腹部を破片が貫通している。このように

隊員数十名が戦死、痛恨の極みである。

負傷者も多く、私も左目の上をやられたが鉢巻きをして、戦死者の収容に頑張った。

翌十五日、重大放送があるとの連絡を受け、正午に生存者は集合して玉音を聞く。——アア終わったか。一日早ければこんなことにならなかつたのに、隊長以下多くの戦死があり、終戦処理のこと等、放心状態になる。この惨状の中で、よくも生き残ったものだと自分自身を疑った。指揮官はいないが放置することはできない。止むなく奮起して自分がやることを決心して全員に凶ったが敗戦のショックで処理についての前向き意見は出てこない。私は一喝して、生存者の中から十名程選び、先ず戦死者を旧射撃場に運び茶毘だびにふすことから始めた。全員手分けで大八車、リヤカー等運搬に利用出来るものをかき集め、戦死者を積んで運んだ。燃料は航空ガソリンと家屋の残材だ。初めての経験だったがやればできる。遺骨は封筒に一人ずつ入れ本部に納めた。

翌十六日の払暁ふっきょう、岩国基地からは数機が発進し洋上の敵艦に突っ込んでいった。

本土最後の大空襲であり砲台を中心に二キロメートル四方に集中爆撃を受け一般市民を巻き添えにした例は他に見当たらない。

終戦前日の八月十四日は私の運命を変え、忘れ去ることのできない日である。従って私には今だ戦後は終わっていないのである。合掌。

爆撃開始十一時三〇分より約三〇分間。

飛来機数一二〇機。投下爆弾約八〇〇トン。

約一五〇〇発。死傷者約一八〇〇人。罹災者約五九〇〇人。

私の海軍

是 信 弘(七十二歳)

尾張六四二一

(一) 召集令状

紅葉の初秋は肌寒い。今夜は満月しかし煌めく星は淋しく北風に揺れてみえる。照らし出された田圃道を自転車で急ぐ「今晚は。今晚は。」、返事が無い。雨戸をコンコンと叩く。一声大きく「今晚は、役場の是信です。」「ハイ、分かりました。」と女の声。しばらくするとパット電灯がつく。「アーンお母ちゃん」と子供の泣き声。とうとう三人兄弟が一斉に起きて泣きだした。雨戸を開けて家の中に入ると、主人は座敷に座り涙でぐちゃぐちゃになった顔の二人の子供を両脇にご苦労様ですと頭

を下げる。

母親は一番小さい女の子を背中に、台所で火を焚きお茶の用意をしている。家族は私の来たことで、召集令状を持って来たことを察知している。役場を出た時から家庭の状態を知っているだけに気の毒で足は重かった。

老人はいるし子供は小さく農家なので田畑は、——これからどうするのだろうか？本当に他人事ではなかった。

火鉢に火が入る、奉公袋より令状を取り出して、主人に「お目出度うございます。」と言って渡す。「ご苦労です覚悟はしていました。後はよろしくお願いします。」と、奥さんは乳飲み子を抱いて震えている。受領印を貰ってお茶を一杯頂き、「武運長久を祈ります。」と言って家を後にした。

このように、昭和十二年七月、北京郊外で一発の銃声から、日支事変が勃発し、十五年ごろより在郷軍人、補充兵を問わず、召集令状が来るようになってきた。毎週のようにこうした事を体験していくうちに、日本の、そして自分の将来を真剣に考えるようになった。

(二) 銃後の守り

五人兄妹の長男であり、上級学校に行きたくても近郷には無く、二十キロメートル以上ある岡山市まで自転車通学しなければならなかった。家庭の事情もあり、思索していたときである。

村長（当時は村）が訪ねてきた。是信君、「書記が召集されて欠員になるので役場にきてくれないか。」と言われ、又地元（組合立の土曜学校（全日制農業校））があるので、二部へ行きながら普通文官試験を受ければよいと誘われ、母も同意したので役場に入ることにした。

当時の役場は、戸籍の謄・抄本の手書、税金の計算、納付書の手書、統制経済なので配給事務、入隊、召集、徴用等の兵事関係等々、人口約二千五〇〇人の村役場は職員九名で朝から夜まで、勉強等する時間はない。

また事務以外に、出征軍人の留守家庭へは女学生を引率しての、田植、麦刈、稻刈等、出征兵士の壮行式、警防団、在郷軍人活動、戦死者の村葬、慰霊祭等の催行、一番つらかったのは戦死公報の伝達であった。

当時は国民皆兵といって、「一億火の玉」「銃後の守りは引受けた」「ほしがりません勝つまでは」、「兵隊さんは命がけ私たちは襷たすきがけ、」と女、子供まで動員され工場へ、そして竹槍訓練まで。国防婦人会はモンペ姿で、戦地へ慰問袋を送りましようと着古しの木綿の着物で袋を作る。

当時の愛唱歌に

何は無くともご苦労様と

忍びや涙も文字となる

慰問袋を送ろうじゃないか

届きゃ人形も

ものを言う

慰問袋の中には精一杯の心尽くしの、煎り豆、甘蔗（さつまいも）の蒸し干し、村の近況ガリ版刷、小学生の慰問文、鉢巻用に千人力といって千人の男性に力の字を寄せ書きを、千人の女性による護身用腹巻の千人針には五錢玉、死線（四錢）を越える意味で心をこめて縫いつける。また、出征が決まると、氏神様（地元神社）で武運長久を祈願した。その後で地区民は、十人前後に分かれて、遠くは自転車で二〇キロメートル位まで、また女、子供は近くの神社に祈願して回った、すなわち、百社参りである。

いわゆる、今日のボランティアの原点である。食べ物と言えば米、麦は供出で不足し、古米に麦を入れたもの、おかずは菜っ葉に大根汁、代用食の手作りうどん、甘蔗のつる、ドングリ等木の実、草、なんでも食べる。南京（かぼちゃのこと）ばかりたべて体が黄色になったほどである。

海鮮魚は手に入らず川魚は大変ご馳走で、鰻、どじょう、なまず、ふな、昆虫からへびまで食べる。標語にも「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」。あるとき悪いやつが「工夫」の工の字を消して、夫がたらぬとして問題を起こしたエピソードもあった。

リンリンと今夜も警察署から電話が掛かり、召集令状を届けると連絡をしてきた。気掛かりな男たちが一人、二人と役場に集まってくる。当時の想い出はつきない。

(三) 流転の海へ

「村長さん私は海軍に志願することに決めました。」十六年夏のことである。「エッ、君が海軍へ？」口元を引締めてジツト私の目をみる。「本当か父親は亡いし長男で戸主だよ。役場の仕事にも馴れたのに誰かに相談したか？」「まだです。これから相談します。」「オイオイよく考えよ。」と後は無言のまま。

村長の立場としてまた戦時体制の社会情勢からして、行くなと止める訳にはいかない。親代わりのような村長の気持ちは痛い程理解できる。しかし、このまゝでは現役とし兵役の義務を果たさなければならぬ。次々と村内の男たちは召集で送り出されていく様をイヤというほど見てきている。いずれ行く身だ、少しでも早く志願して海軍に行き一生懸命勉強して頑張れば、同級生達が来たときには、先んじて進級もしているし、村民の励ましの壮行式で出征し、家族の誇りでもあり、万一散華しても村民あげての慰霊で思い残すことはない。まず母を説得、弟妹は「兄さん頑張ってください。」と励ましてくれる。親族も説得し留守の家族への協力も約束できた。

そして十六年の秋、海軍採用試験の日がきた。学校の講堂には近郷の町村よりぞくぞくと受験者が集まってくる。軍服姿の徴募官十数名が正面に並び注意事項を説明する。各町村長が来賓として席につき場内を見守る。邑久村からは七名の顔見知りを受験。机の上にはまず数学の答案用紙が配られ、徴募官の「始め。」の号令で問題と取り組む。次は国語、その間隣に座っていた同村の柴田(亡)が私の足を蹴りながら小さい声で「オイ見せろ見せろ。」と合図する。解答もできていたので徴募官を目で追いつながり見定めて用紙を手で送った。——ピッピーと号笛で「ハイ止め。時間だ。」と答案用紙を集める。採点の間は休憩で昼食をとる。その間は講堂内に缶詰、友だちと雑談をしていると、ピッピー。「これから呼ぶ者は前に来い。邑久村の是信と柴田。」…………アしまった。バレタか。血の気が去り胸の鼓動が止まらない。二人は「ハイ。」と返事をして前に出た。すると口角泡を飛ばして「どちらが見たか。」二人とも見てないと言張す。「どちらも見てないのに同じ答えとは何事だ。」と声も大きくなる。「ヨシ試験のやり直しで調べる。」と前の答案用紙より違うものを渡された。来賓席の村長は悪い顔をして見ている。脇の下から冷汗がタラタラ。終わって提出したがこゝで待てと言われ、もう駄目だと思ってシュンとしていたとき、ピッピー「これから合格発表する。」と次々と名前を呼ば

れ、最後に私と柴田が呼ばれた。

別に咎めもなくヤレヤレ。大失敗をしたが大勢の中、学科受験で残ったのは約二十人。邑久村からは七人中二人だけだった。

午後の身体検査も無事合格したが村長には申し訳ない事をしたものだ。合格したのは、柴田と私の二人だった。柴田とは入団にさいし壮行式でも小学校の朝礼台と一緒に立ち、海兵団でも同分隊の一教班と二教班、配乗でも巡洋艦鈴谷と仲良く不思議な縁だった。

初陣の、ソロモン沖海戦、ガタルカナル島の砲撃、南太平洋海戦へと海の流転はつづく。——しかし苛烈な海戦でまた孤島の基地で国を守るために、私達の身代わりとなって散華し今日の平和な経済大国の礎となった。

戦友の霊を慰めることは、生き残った我々の責務と考える。従って悲惨な、そして貴重な戦争を身を以ての体験を風化さすことなく、後世に語り継ぐ戦争と平和の語り部として、最後の一人になるまで頑張らなければならない。



海軍特別幹部候補生の体験

坂 口 一 海（六十七歳）

尻海三八一六 元会社員

昭和二十年三月、西大寺中学校卒業後も引き続き学徒動員先の牛窓協和カーボン（株）に勤めつつ、就職先を物色していた。同室の嘉数集君と通信省講習所を受験した。そのころ海軍の特幹を志願してみたらと要請があり、同室の入江和芳君と応募した。近視の私は衛生科に、入江君は技術科を志望しともに合格した。早く士官になれるという宣伝も一応、魅力ではあった。村民に送られてバス停で別れの挨拶をした。特攻精神で国の為に頑張りますと。入江鉢郎村長が激励の挨拶を下された。一人の叔母が泣いているのが見えた。私は柏村の良ばあさんより頂いた一丈余りの赤い布を持って勇躍尻海を出発した。小さな自負と自己満足さえあった。十八歳だった。「花も蕾の若桜五尺の命ひっさげて国の大事に殉ずるは吾等学徒の本分ぞ、ああ紅の血は燃ゆる」の心境であった。中等学校卒業対象の特攻隊員養成が目的のようだった。戦争末期症状の当時、数千人もの若者を一度に入団させ教育させたのだ。軍艦も無く航空機も少

なく肉弾戦より方法はなかったのではと思われる。然し、当時の我々には全く知る由もなかった。海軍の特幹は我々の一期のみで終わり所謂「幻の特幹」でもあった。「豆の飯たべて入団せし日なり昭和二十年五月十八歳なりき。」

大竹海兵団の日課は厳しいの一語に尽きた。少しの油断も出来ぬ毎日であり、総員起しより消灯まで死にもの狂いの猛訓練であった。カッター漕法、手旗訓練、結索訓練、雨中行軍、空襲時の避難……暑さを忘れての特訓で、同僚とただただ耐える他に方法は無かった。君達は特幹の志願だからと普通の新兵の二倍は殴られた。教班長と階級の相違ない事も一因であった。海軍精神注入棒で尻を殴られる、然も共同の制裁だから一人の落伍者がいても全体が制裁を受ける。全くやり切れない思いだった。同分隊の山田練習生は痔のため戦闘帽を尻に当てていて発覚し徹底的に殴られ、とうとう医務室に運ばれた。又夜間空襲には閉口した。然も頻繁だった。二キロメートルもある断崖防空壕へ避難する。ハンモックを担ぎ背囊を負っての速駆けである。昼間の猛訓練にこのおまけである。生命がけで必死の形相で生地獄とはこの有様かとも思った。軍隊とはこんなものかと隣の山下練習生と消灯後話し合った。大竹海兵団を二ヶ月で退団した。福光分隊士は「君達流石によく頑張った、空襲時は可哀想であった」と講評された。

七月二十日に賀茂郡乃美尾村の衛生学校に入校、下士官待遇であった。海軍病院と並び屋根に大きく「赤十字」と印してあり、B 29が広島、呉方面から飛来しても爆弾の投下も無く山林に避難するのみで気楽だった。

八月六日の広島原爆の日に朝から林間学校と称して林の中で戸村薬剤大尉の看護学を勉強していて「ピカドン」に遭遇した。閃光^{せんくわん}につつき轟音と共に白雲がもくもくと山の彼方^{かなた}より空一面に拡大した。大尉は真ぐ原爆だろうと言った。そのころ週に一回位陸軍の将校の指揮の下「タコツボ掘り」の特訓があり、米軍の本土上陸が近いのかもと思った。本土上陸の場合、第一線に出撃する運命は必至であろうと同僚と話し合った。

五十年経過した現在でも、もし本土上陸が決行されていたらと思うと戦慄^{せんりつ}に全身が震えるのである。最近沖繩戦記のテレビを見たが実に悲惨そのもので言う言葉を知らない。

「百日間に十キロ瘦^{すく}せて復員せしと八月がくれば必ず憶い出す。」戦後五十年国会でも、全国津々浦々にも多彩な催しがあるようだ。反省するに絶好の機会だ。いかなる情勢にも戦争してはならない、戦争のない平和な社会こそ吾々の念願である。五十年来平和な社会を享受し得たことは何よりの国民の幸せであった。私は戦時中の短い、浅い、少ない体験を経て切実に平和の尊さを思う。そして未来永劫^{えいけつ}平和の続くことを念願して止まないも

のである。

山下練習生こと山下典男氏とは交際を続け、本年も夫妻で来宅され五十年前を回顧し平和を誓い合った。

「五十年を経て戦時中の体験記をしるしてをりぬ平和こそと念願しつつ。」

註1 入江和芳 岡本和芳 果樹園経営

西隆寺在住 農業経営

註2 山下典男 竜野市揖西町長尾

前竜野市助役

支那事変従軍の思い出

佐藤 梅夫（七十九歳）

豆田六四八

戦後色々な本を読んでいると日本の敵はアメリカやイギリスではない日本の陸軍だと書いてある本を読んだ事がある。その陸軍に籍をおいて北支戦線から除州戦線まで参戦十三年四月除州で負傷するまでの従軍の思い出を書いて見たいと思う。昭和十二年一月現役兵として岡山歩兵第十連隊第五中隊に入営。兵

営での上下の規律が厳しい集団生活は長い人生に取って何よりよい体験であったと思う。四月第一期の検閲、七月第二期の検閲これで兵としての一通り訓練は終わった事になる。その時成績よい人は一等兵になれる。

昭和十二年七月七日支那事変発生

岡山の十連隊も第五動員として七月末戦時編成、八月十日神戸より乗船。八月十五日北支太沾に上陸。天津までのぬかるみの行軍は忘れられない思い出である。我々五中隊は旅団司令部の護衛であった為十連隊の本隊より一日おくれて追いついた時、第一中隊は東辺庄を占領万才を号^まんでいる処であった。第一大隊の大隊長は擲弾筒は一大隊の指揮下に入るようにとの事で青海の手前東五里庄と言う部落に宿営。その夜敵襲を受ける。支那の民家は周囲を土塀に囲まれている。擲^て弾^{だん}筒は銃服を開ける必要はないが四十五度にたおして打つので土塀に当たる心配がある。五十度位で打った瞬間加減塀の外へ打ちまくった。弾はいくらでも補給して貰^もえた。擲^も弾^も筒の性能は距離で六十m—七十二〇m、着弾地点で直径十五mの範囲に殺傷能力がある事になっている。

夜があけて一大隊の将校が視察に来られてよくやってくれた。この功績は五中隊へ報告しておくからとほめられて静海の五中隊まで帰った。

馬廠川渡河戦

五中隊は馬廠川の最前線部落前屯^{えん}を占領、渡河は六中隊。日本軍は大小百門の砲によって総砲、射敵の逃げたのを確認して渡河した^{とこ}処、唯一機残っていた重機か軽機かわからないのが上陸地点の右うしろから射撃されるウゴカれない第七中隊が上陸してやっと渡河は成功。上陸を指揮中の第二大隊長堀田中佐は装甲艇の中で戦死。

渡河後青と言う街へ入り中隊本部の宿舎として片付中、敵の残した火薬の入った木箱が爆発、五人戦死三人負傷。中隊長も負傷、当番の兵も負傷した為私に当番になる様にとの命令で入院中の青の野戦病院に入った。中隊長の負傷は体の前全身を火傷されている為寝返りも出来ない。次々と護送されて天津まで帰った。天津には天理教のおばさんが奉仕に来て下さっていたが夜はいない。オイッ起きろと起こされて腰の下へ手を入れてモマされる。こんなことをさせられるより野戦にいる方が大分よいわと思いつながら命令だから仕方がない。軍司令官、師団長以下各隊長に挨拶状書かされる。私は小さな字引を持っていたのでわからない字は辞書を見ようとすると、中隊長はそれをしては字は覚えられない。ワシが空間に字を書くからそれを見て覚えろと言われる。当時は候文^{そうぶん}で文の形式は大体定まっていたらしい。二度目にその字が出た。その字を尋ねられない、苦労

したけどよい勉強になったと思う。

中隊長内地還送の為北支タンクローの港まで見送ったとき、お前には色々とお世話になった。お互い生きているかぎり交際しようでと言われて中隊長が死なれるまで交際した。

私は十三年四月除州会戦で負傷、岡山の陸軍病院に帰った時中隊長は連隊副官をしておられたが、度々見舞いに来て下さる。看護婦さんがビックリして佐藤さんどうしたのですかと聞かれる。事情を話して納得して貰った次第。戦後五十年謹んで多くの戦友の御冥福をお祈り致します。

終戦五十年を振り返り思うこと

柴田英男（六十九歳）

上山田六八一 農業

現在の中央公民館の片隅に五十数年前の邑久高等時代の講堂がそのままの姿で残っている。私はあれを見る度に当時の軍国教育の全盛期を思い出す。そして、日本の国は我々が守らねばと堅い決意を胸に、私は十七歳のときから軍籍に身を置いて、ひたすら祖国の繁栄と同胞の幸せを願って、シベリヤ抑留を経

て復員するまで丸六年間生と死の谷間を歩いて来た。そして、五十年後の今、太平洋戦争を振り返り現存次のような思いで一杯である。細川総理の侵略発言以来、政治家をはじめ各界の人により色々戦争を反省しながら議論され、そして、自分の考えを主張されているが、私も侵略を否定することは出来ないと思う。しかし、静かに人類の歴史を眺めた場合、当時は強い者が弱い者を支配する植民地支配時代で、日本の歴史なら戦国時代に当たる時代だったと思う。我が国が朝鮮満州を支配したのと欧米列強がアジアの多くの国々を支配したのとだけの差異があったか、中味は全く同じだと思う。当時印度のチャンドラポーズ、ガンジー等独立の指導者たちは何とかしてイギリスの支配から逃れようと必死になって、あるときはイギリス政府に協力し、あるときは投獄され、又あるときは地下にもぐり独立の時期を一日千秋の思いで狙っていた。朝鮮の人々として思いは同じだったと思う。もし彼の太平洋戦争がなかったとするならば、我々が小学校時代に学んだ世界地図は未だに其のままかも知れない。彼の戦争が人類の植民地支配時代にとどめを刺した事実は疑う余地はないと思う。これは人類の歴史に極めて大きな意義あることだ。最近侵略謝罪、不戦決議等、色々問題が出て来ているけれど、かつて多くの植民地支配をした列強は日本がやったのと同小異のことをやって植民地を支配したの

だ。これらの国々が謝罪賠償を行った話は私の勉強不足か、どうも聞いたことがない。日本は敗戦国なるが故に仕方ないのか、それとも優等生なのか。中国朝鮮等すでに国家間の条約により決着済の問題である。土下座してすみませんと謝罪してもそれ以上の事は胸を張ってよいと思う。ある人は言う「我が国の今日の繁栄はアジアの人々の犠牲の上に立っての繁栄である」と。又ある人は「国のため生命を屠^として戦って亡^とくなられた方々のお陰である」と言う。しかし、私は戦後から今日までアメリカの核の傘の下で事無きを得て、ひたすら祖国再建に力一杯頑張った国民の勤勉努力の結晶だと信じている。今日迄の人類の幾多の戦争を振り返り、お互いにそれぞれ恨みはあると思うが、世界の歴史又時代は大きく変わって来た。お互いに恨みは徳をもって流し、お互いに助け合い未来に向かって進むべき時だと考える。私は若き日死生苦楽を共にして祖国のためと確信して散って行った今は亡き多くの戦友の面影に対して、この現実を静かに語りかけながら、余生を送っている次第である。

兄妹五人が戦いに参加した事

下地倭子^{ヤス}（五十八歳）

大窪四八七番地

支那事変、そして大東亜戦争の敗戦という日本国の戦いの終結を見ずして、若い生命を君国のためにと散らせていった私の実父陟、陸軍伍長。そして叔父惣太は、北支にて左脚に重傷をうけて傷痍^{しょうい}軍人となり帰還し、叔父清は北満の戦いに参加帰還した後、病を得て若くして病没。一番下の叔父角正は、飛行兵として南方スマトラにて戦死。そして叔母常子は日本赤十字の看護婦として、国内ではあったが、陸軍病院にて、戦争で傷ついた兵士の看護をしていたという。

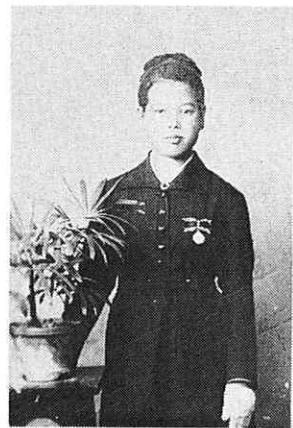
陟伍長の遺児である私は、父の戦死した年齢の倍以上にもなり、今は、四人の孫たちに、

「おばあさん」と呼ばれる身である。自分の子供、そして孫を持ってみて、亡父は、どんな思いで、異国の地で、妻や幼児を残して死んで行ったのかと思うとき、その心中は、いかばかりであったかと思うと、自然に涙が流れるのを止めることが出来ない。

戦時下では、自分の考えをどうすることも出来なかったのであろうが、人間として生を受けたからには、天寿を全うするのが自然であろう。なのに二十代で命の終止符が打たれたのだから、現在のこの日本の現状を天国からどういう思いで見ているのだろうか。私は、日々、佛前に合掌し、「どうか安らかに眠って下さい。」と、祈るのみである。



野戦看護婦の壮行会（4点 写真提供：下地 倭子 様）



当時の憧れ日赤看護婦の制服

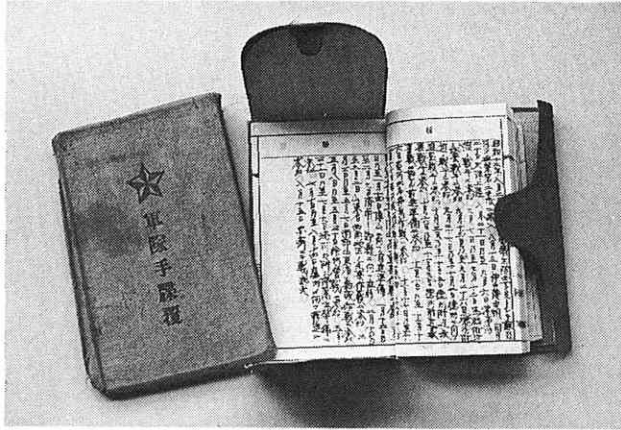
そして、女性ながらも、先の戦争参加体験者である常子叔母の記憶の糸をたぐりよせ、話してもらったことを記しておきたい。

昭和十六年十二月一日、臨時救護看護婦に任用され、昭和十七年一月二十日、第一三二救護班補充要員として、広島陸軍病院三滝分院に派遣された。陸軍病院までは、千田町の宿舎より、市電と徒歩で一時間を費やして、衛兵の門をくぐる毎日の勤務は、連綿たる赤十字の矜持（きんじ）のもと、隊伍堂々闊歩したあのころが彷彿（ほうぶつ）とよみがえる。

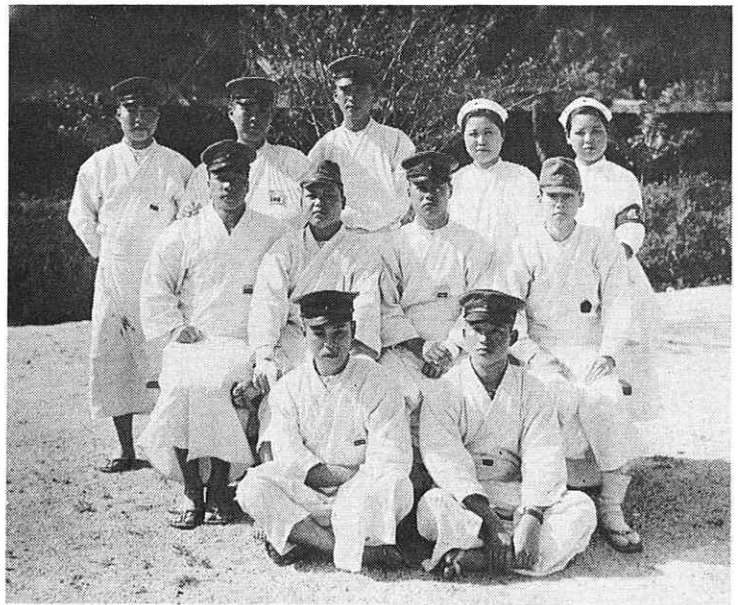
戦禍は次第に広がり、角正兄は、チチハルからスマトラ島に移り、毎週のように出していた手紙も届かなくなり、案じていたとき『ドラム缶風呂で見る月は美しい。内地でお前も見てい

ることと思う。しばらく便りが出せないが、元気で銃後を守り、傷ついた兵士の看護に努力して欲しい。」と書いた便りが最後となり、こちらから、幾通出しても返事はなかった。

昭和十八年後期には、戦況も次第に悪化して、学徒動員、女子挺身隊編成に至り、軍人軍属を問わず、野戦から続々と患者を収容するようになり、広島陸軍病院は、検疫、地方転送、護送患者が多く、山積の臨床に次ぐ思わぬ雑事も重なり、連統当直明けなど、皆、泥のように眠ったものです。皆んな助けあい



陸 軍 軍隊手帳



移送前：傷病兵の皆様と

於：広島陸軍病院

励まし合って良く頑張ったものだ。私は角正兄さんの戦死を知らせを受けてから、一度に体調を崩し、微熱が一ヶ月程続くのを出勤していたが、高熱のため、体を支えられなくなり、広島陸軍病院本院に入院することになった。続いて広島赤十字病院に移り、昭和十九年一月四日、帰郷療養のため、解任になった。帰郷して一ヶ月程で、清兄さんの死に遭い、お国のためとはいえ、三人の兄を捧げた気持ちは味わった者にしか判らない感

情である。そして、昭和二十年八月四日、終戦も間近に、再度の私に召集が来て、地区の皆様に、見送りを受けて広島に行ったのだが、家の状況の嘆願書を出していたので、交替の人を作っていて下さり、八月五日帰郷。そして翌日は、広島原爆投下の日となり、今、当時を思い起こすと、色々の思い出はあるが、唯々、お国のためと信じ、一生懸命若き血を燃やした当時を、終生忘れることは出来ない。只、平和な現代に生き残っている自分を幸せに思う、と話してくれた。

もう二度と戦争の犠牲になるのはお断り、父や叔父達が、犬死にでなかつたと信じ、日本の平和の礎となった肉親に、心から安らかにと祈るのみである。戦時のことを忘却のかなかたへ押しやることなく、正しく後世に語り継いで欲しいと、切に念ずるものである。

一兵卒の追想

田代 正人（七十五歳）

虫明三二五七

一、さらばラバウルよ 又来るまでは

暫し旗めけ ユニオンジャック
俺が死んだら 其の子が孫が
きつと 日の丸たてゝやる。

二、船は出て行く ガゼルの港

霞む伯母山 北山ふもと

声をころして 心で泣いて

友よサヨナラ サヨウナラ

（伯母山や北山はラバウルにあつて日本将兵の基地が多数ある所です。）

幾多の苦難の戦地、戦陣の手記戦記が発表され映画化して上映され、私などのおぼろにうすれた記憶では、とても表現出来ることではありません。然し、望郷の思いを胸に、南太平洋作戦の渦中で南暎の土と化し、護国の神となり北斗星の輝きに祖国を慕い続けた戦友を残して、ニューブリテン島を後に、復員船の人となつたとき、南十字星は冷たく光を降りそそいでいました。誰れからともなく合唱に変わったのはこの唄でした。あれは乗船前夜、ガゼル劇場で急きょ公演した私達のサヨナラ演芸会の合唱でした。想えば停戦後から引揚船へ乗船まで、生きて祖国への一念から努力と苦難の連続でした。

食糧増産のため開コン作業の他に、進駐軍へ作業奉仕、現地の道路工事の割当作業の人員確保、厳しい作業勤務のためマラ

リヤ、 Deng 熱患者続出等栄養失調兵の休養などで勤務割は大変きびしいものでした。

内地の土が無事に踏めた感激も忘れがたいものですが、無念の涙を流して異国で散華した戦友を思うとき、絶えず胸中は複雑です。故郷の山河に優しく包まれて、足掛け四年のニューブリテン島、ヨーク島等、外地で転戦陣地構築でいためた心身の失調回復に努め、敗戦疲弊の祖国復興へ参加し、経済大国と言われるまでに成功し、国際社会へ貢献出来るまでに発展出来たと自負しても、自分の周囲を見ると、過疎の地域に老人のみ目につき、若者の声はなかなか聞けず、子供たちはお車で保育園まで送迎の世の中と変わっていました。休耕田や松枯の山、山河にコダマシタ学童の声は今はない。昭和も遠い昔となりました。

こんな思いのとき、比島方面戦没者慰霊巡拝団に参加して、弟の戦死の地、比島ルソン島バレテ峠を中心に慰霊供養の旅は、マニラより北部へ三百キロメートル延々と続く平野に展開した戦時交戦の過酷さも忍ばれ感無量で稲田に続く椰子林を縫って、供養慰霊祭を数ヶ所で行いました。

なお、自分が従軍したラバウル、ニューギニア、ニューブリテン島の戦没将兵戦友慰霊巡拝にも参加して、「夏草や兵どもが夢のあと」を痛感し、未だ敵味方の船舶や航空機の残骸が今

も散乱し、現地の子供の遊び道具になっていました。ラバウル港外で、上陸準備中敵機の襲撃により輸送船と共に散華した戦友供養のため、船を借り港の内・外で供養祭を執行のとき、内地より持参の白菊と紅バラ、百合の花束が波に漂って、いつまでもいつまでも潮の流れのままに、ただよい続けるなか船あしを止めて、花束と共に流され続けても誰も読経をやめようとせず、線香の煙のせいでもなく涙が流れつづき、心ゆくまで波間を漂ううちに、あの伯母山墓地の上に月が美しく椰子の木を照らしラバウルの街の灯りが、ほのかに点々と見えました。

戦時中には思いもつかない風景を眺めながら、改めて平和の尊さを痛感し、貴重な平和の基礎を築いた戦友の御めいふくを心から祈念して私の旅の締めくくりは、ニューギニア政府職員、ラバウル市長、昔のカナカボーイ（現在はキャプテン）と呼んだ子供たちとの合同晩さん会と現地人と日本人の合同供養碑の前で合同の慰霊祭が執行されたことになりました。

帰国後は西国や四国八十八ヶ所巡拝の旅に、都合のつく限り参加いたしたいと思うこのころです。

私の戦後

業 合 隆 雄 (六十六歳)

北島二一六

戦後五十年を迎えた。この大戦についてはいろいろもつともな論議もあるが、私達はその時々を、国のため家族のためと懸命に生きた。それしかなかった。そんな時代であった。

現在の自由も豊かさもその基礎があつてのことと思える。生活が豊かとなり、物質的には豊かとなったが、本当に幸になつたかどうか。誰しも安楽な豊かな生活を望まぬ者はないが、乏しさの中、貧しさの中でこそ光る人間性もある。堪えること、自制することをも、もっと考えたいものだ。

近くあつた阪神大震災時瓦礫がれきと破壊の中で多くの人々の毅然とした整然とした生きざまや、復興への立ち上がり、若者達のボランティア、善意は終戦後の荒廃混乱とその復興の姿を二重写しにしたようで、感無量のものがあり、「やはり日本人はすばらしい。」の感を受けた。

戦中の体験記は既刊の「邑久町ふる里体験集」に書かせていたぐいので、終戦からその後の体験の一部を書かせていたぐ。

終戦の年の八月は九州太宰府の父の任地にいたので、終戦の詔勅はそこで聞いた。田舎であつたが早物資は不足し、若者は皆兵隊にとられて町に野に若者の姿はもう無かつた。敵機の来襲を告げるサイレンが日に何回も鳴り響き、家から見える太刀洗の飛行場にも福岡市内にも爆発音や火の手、白煙が上がり、対空砲のパッパッという豆を炒るような音と炸裂煙のはるか上をB29がゆうゆうと飛行雲を引いて飛び去っていくのをどうすることもできない、歯がゆい悔しい有り様、沖繩もとうとうやられてしまったらしい。いつ博多湾に連合軍があらわれるかわからない緊迫した状況であつた。しかし、終戦の詔勅で、「あゝ、これで終わったのだ。」というほっとした感じと、緊張が急に解け、腰が抜けたような状態で、次は、「これからどうなるのか。」という不安であつた。得体の知れない敗戦後の大混乱の時代の幕開けであり、新生日本への出発点でもあつた。博多にはあすにも連合軍が上陸するという風聞が流れて、女性や子供達が山手の方へ避難を始めたと聞いたが、一週間もすると噂も自然に消えていった。福岡ではアメリカ軍による日本軍の武装解除が行われ、民間の持つ刀や槍などもすべて提出するようにとの通達があり、皆息をひそめて連合軍の進駐を見守っていた。

九月には無蓋の貨物列車で復員の兵士に交じって煤煙でまっ

黒になって帰郷した。呆然とした敗戦の兵、生気のない狼の群の中にいるようでもあった。沿線の主な街も岡山も空襲を受けて焼け野が原と化していた。この年は邑久町も二度にわたって大洪水に見舞われ、まさに神も仏もないような大変な年であった。

やがて疎開していた大学も開校し、東京での学生生活が始まった。首都は完全に破壊されており、灰まじりのからっ風の吹く街の中のどこからでも雪を頂いた富士山がよく見えた。銀座のあたりにはアメリカ兵のジープに化粧の濃い女性達が同乗してガムを噛みながら嬌声を上げて走り回っていた。

食糧難で物資の極端に乏しい時代であったが、先生方も学生もその中で、乏しいながら戦中には無かった平和で勉強できる喜びをかみしめていた。

学生寮での生活は、復員兵あり、人生経験豊かな年長者あり、海外からの引揚げ者あり、毛色の変わった人がいて結構楽しかった。休日には食糧調達係として電車で武蔵野の面影の残る郊外に出掛けて、さつま芋の袋・ごぼうの束をかついで帰ったり、鶏をぶら下げて帰ったりもした。うどんを飯のように炊いて食べたり、「すいとん」というだんご汁もうまかった。腹の足しになれば何でもよかった。白米の飯は「銀しゃり」と言ってみて、たにお目にはかゝらなかった。「やみ汁」と称して暗闇で食べ

る得体の知れない汁も味わった。具は各自の持ち寄り、隣のお宮で今朝も鳴いていた鶏の肉、食堂の残菜をあさっていた猫の肉だと称する肉、たくわんのしっぽ、切つけないそのまゝの野菜、などのごった煮。

授業の方は国文科であったので、源氏物語は武田祐吉先生、万葉集は折口信天先生などの大先生が講義に当たられ内弟子の方がお世話されていた。万葉の相聞恋歌、古事記の国生みの説話など感動したりあきれたりしながら聞いた。万葉長歌も何首も暗誦させられたので今も愛唱している。

休日や休講日はもちろん寮室の万年床の中、授業は寝間着の上に袴と羽織を付けて玄関に脱ぎ散らしてある残った下駄をはいて教室へ、終わればまた万年床へ直行、帰省のときは寝具を質屋へ質入れして、帰寮すると受け出す。こうすると安全。私の物も他人の物も区別のないような寮生活であった。あつという間に学生時代は終わった。

卒業しても就職難の時代、文科系の就職先は限られていたが、幸に隣郡の中学校に就職できた。六・三・三制の中学校も発足したばかり、二校の小学校に間借りしての分散授業、午前中はA校で午後はB校でと先生は自転車で回り持ちの授業、机も椅子も教具も寄せ集めであった。

昭和二十三年新校地が田圃の中に決まり、保護者・先生・生

徒の奉仕で田を掘り下げてその土で土盛りをして一棟の新校舎を建て授業が行われた。掘り下げた穴はそのまゝとなっていたので放課後は魚釣りができた。当時は高校進学者は数えるほどしかいなくて、補習授業もなかった。

先生方も都会から疎開の学者先生・復員の将校・宝塚の声楽担当の方・大企業の研究員あり、私のような青二才ありで校長さんより学識のある方もおられて、それぞれの技量と裁量でききには教育課程を越えて特色ある授業が行われていた。

若い私達が何日も宿直を引き受けて、飯の上に醬油をかけただけの夕食をとったり、生徒達を集めて宿題を見たり、進路話をしたり、時にはピンポンをして楽しんだ。やがて校地となる学校田で稲や麦を作って甘酒をしたり、パンを焼いたり、中古の輪転機を買って教員で俳句集や名刺、はがきの印刷を引き受けたりもした。苦しいながら何をしても楽しかった。月給は雀の涙ほどで月の十五日と三十日に分けて支給され、ズボン一着がやっと買える程度、家では学生時代の小遣いの方が多いのではとあきれていた。「やめて鶏でも飼おうか。」とやめられた先生もおられた。宝塚の先生も大学者先生もいつの間にか姿を消された。

昭和二十五年邑久中学校に転動した。当時は邑久村他福田・今城・豊原・本庄・玉津・笠加村の学校組合立、長浜の小津や

粟利郷の先生も通学していた。担当の三年生は八学級四百人近く、全校では千人を越えていたのではないかと思う。校長は表佐代治先生、三年担任は森隆先生・上野進先生・木村政夫先生など後に郡や県の教育界をリードする先生方に囲まれての、やり直しのような教員生活が始まった。郡内には裳掛・牛窓・長船の三校がいずれも「邑久中に追いつけ、追い越せ」としのぎを削って頑張っていた。

「国語の教員は習字もやれ」とやらされて、先生より上手な生徒には困りいった。「型破りの教員であったので当時のことを書くのは恥ずかしいし、生徒にも迷惑を掛けた。往事茫々の霞の中である。きびしい進学指導も行われ、生徒指導もきびしかった。それを受けて泣いた人、反発した人、感謝した人も早六十に手の届きそうな年齢となった。

繰り返し聞いた幼時の昔話とか若いときの体験は、いつもは忘れていても、ちょっとしたきっかけであざやかに思い出すことがある。終戦の日の庭に咲いていた赤いカンナ、蟬の声の満ちたせんだの木、学生寮の玄関の脱ぎ散らした下駄、万葉秀歌を講義されるうっとりした老先生の顔、初任校の堀を泳ぐ青大将、進学に失敗しべそをかく生徒の顔等々、つらかったこと、楽しかったこと、若く輝いていたころの思い出がよみがえってくるのは、そのとき、その事が私全体を満たしていたからだろ

うか。

戦後五十年、私の歩んだ道

半田 愛子（七十四歳）

福谷二九二五

春のおとづれを知らせる彼岸桜が咲き始めた昭和十八年三月末、主人は子供達の寝顔を眺め、「あとはたのむ」と握った手の暖かさが最後の別れになろうとは、長男三歳・長女一ヶ月、私は二十三歳でした。満州事変、支那事変と戦火の中を生還した主人。今度もきつと帰ると信じて送ったものでした。戦地は不自由だろう慰問袋を送りたい、便りも書きたいと思っても、場所も分からない、数ヶ月でしたが、待ちに待った便りが届いたのです。胸の高鳴りをおさえて開けてビックリ、ビルマ国ラングーンからの小包。「皆元気でいるか、私も元気だ安心してくれ。」との便りと一緒に子供用の小さな革靴が二足入っていました。嬉しかった。主人も子供達の喜ぶ顔を胸にえがいて送ってくれたのだと涙が止まりませんでした。これが最初で最後の便りになってしまいました。平和であった岡山にもB29が来

襲するようになり、夜のネオンも消え、警報のサイレンが毎日鳴る中を子供の手を引いて、隣接の大学の講堂へ避難して不安な夜を何度も明かしたものでした。戦争も激しくなり人々の心も不安で一杯になったころ、主人戦死の公報が入り、今まで張り切っていた力も一度に抜け、どんな不自由な体になっても帰って来て欲しかったのにと、親子三人泣き暮らす毎日でしたが、今は泣いているときではない。しっかりして子供達を守らねばと考えた末、安全な主人の故郷へ帰る決心をしましたが、初めて行く土地なので不安でした。しかし、今の状態で三人が生きて行くには岡山を離れるのが一番と、当座の必需品だけ持ち鳥取県倉吉の土を踏みました。主人の実家は農家だったので食糧には心配はありませんでしたが、同居している妹達もいて十五人の大世帯で、毎日が大変でした。今までの奥様の暮から農家の嫁として姉、小姑との毎日は針のむしろの上にいるような辛さ、朝早くから夜までの野良仕事、鎌を持てば手を切り、鍬を使えば腰を痛め、何をしても不器用な自分に、身も心も疲れ果て、夜の来るのが待ち遠しかったものです。布団に入れば自分だけの世界、肉親を思い主人との思い出を偲び、声をこらして毎夜泣きました。帰りたい岡山へと。仕事にも大分慣れたころ、六月二十九日の岡山大空襲のニュースを知り、父母のことや家のことが心配でしたが交通は止まり、音信不通の状態。一週間

後一面焼け野ヶ原の岡山に立ったとき、まだ煙の立ちこめてい
る無惨な姿に声も出さず、もし自分達が岡山に残っていたら生き
てはいなかったらうと、体のふるえが止まりませんでした。焼
跡を探していると主人愛用の自転車があわれな姿で横たわって
いましたが、他には何も見つかりませんでした。何もなくなり
無一文の自分達、これから先どうやって生きていったらよいの
か途方にくれ、其の場に立ちつくして立ち去ることが出来ませ
んでした。それから間もない八月十五日の悲しいニュース、日
本が戦争に負けたなんて信じられません。勝利を信じて散った
大勢の人達はどうなるのか？私達はこれから先どうすればよい
のかと、皆不安な日々を送ったのですが、田舎の暮らしには
変わりはなく、寒い冬が訪れて来ました。二十年ころの山陰地
方は大雪が積もり、外で働くことが出来ないのです。一日中「い
ろり」をかこみ皆で糞^{わら}仕事をするのです。草履、むしろ作り、
みの作りと一年中の必要品を作ります。こんな仕事が初めての
私に、指にバイキンが入り雪の中を何日も病院に通いました。
こんな繰り返しの生活が四年半続き、子供達も小学校へ行くよ
うになり、お金にも不自由になり、子供達に欲しい物も満足に
買ってやれぬ悲しさ、不足も言わずがまんしている子供達を見
て、人の力も頼らず、自分の力で自立しなければと決心し、皆
の止めるのも振り切って岡山に帰って来ました。母の所も戦災

にあい苦しい生活でしたが、私達を暖かく迎えてくれ、助け合っ
ての毎日の生活は楽しく、肉親の皆に守られて六畳一間の納屋
暮らしの生活ではありましたが、楽しい暮らしを始めました。
手足を伸ばし誰に気兼ねもせず、笑顔を取りもどした毎日は本
当に天国でした。幸い二十五年一月私も仕事が決まり、再出発
の一步をふみ出すことが出来ました。食器一こ、道具類一こか
ら集めなければなりません。子供達も勉強するにも机がないの
で、ミカン箱に紙を貼り使用したのですが、不足も言わず我
慢してくれました。給料をもらって一番に買った新しい机、そ
のときの子供達の喜んだ顔は一生忘れられません。そのころは
食糧も衣類も配給制で不自由な時代でしたが、田舎には自然の
恵が一杯あります。ワラビ、セリ、つくし、さつまいものくき、
大根の葉っ菜、食用にできるものはすべて食卓を飾りました。
日曜日には子供達と山に行き枯木を集めて燃料にし、井戸水で
米をたき、全く原始的な生活でしたが、小さな電燈を囲んでの
食事も楽しく、大きな病気もせず過ごしてこられたことに感謝
する毎日でした。子供達も成長しそれぞれ自分の選んだ道に進
みました。しかし、私が苦勞した以上に父親の顔もあまり知ら
ず、愛情の一片も受けることなく過ごした五十年間はどんなに
淋しかったか、口に出して言わないだけにかわいそうでなりま
せん。今は親になり平和な日々を送っていることに感謝してい

ます。私も夢中で働いた三十二年間、退職後は少しでも世のお役に立ちたいとボランティアグループに入り、又、好きな趣味を生かしての勉強の出来るのも、主人の援助のお陰と手を合わせています。五十年前故郷に帰ったときの邑久町はのどかな田園風景。狭い道もガタゴトのバスにゆられて通った思い出が昨日のように目の前を横切ります。今の邑久町には近代的な住宅が軒を連ね、電化された日常生活、一人一台の車を持つ豊かさ、農家もすべてが機械化され、昔なつかしい田植姿ののどかさは見られなくて淋しさも感じます。この平和な毎日が戦争を知らない若者達に何時までも続きますよう、あの悲惨な苦しみは私達世代で打ち切り、平和な邑久町が益々発展しますよう願って止みません。

思い出深い郷土

久 本 綾 子（七十三歳）

福谷一五五一

私たちの青春は、戦に明け暮れ健康な男性は、皆さん召集せられて、銃後を守る者は老若男女が、手を取り合い隣組を結成し

てお互いに助け、生き抜かなければなりません。言えば昭和戦国の世と言っても過言ではないと思います。重大なる責任を各々自覚して、自分がやらねば誰がする―報国の気風に満ち満ちていました。私もその一人です。当時青年学校に通っていました。戦はますますはげしくなり、その持ち場に於いて農業要員と名の付く一枚の紙が役場より渡されたのです。山村の田畑は一角たりとて荒れた所などなく、食糧が作られ四季を緑に黄に実るさまは苦しさを乗り越え、真黒に日焼けした肌が物語っていました。

女子青年の竹やり訓練や、手旗、炊き出しなど、先生始め一時兵隊から帰られた人の指導のもとに行われました。軍事産業が追いつかぬ当時、足に履く物などなく、仕事の間を見て、草履を作り、手縫の足袋をはき、重油のかわりに使用するとかで？松の木のやに、しょうこん油（松根）を採る。深い深い山の下草刈りの奉仕作業に汗で、ぐっしょり濡れ苦しかったあの日…。でも皆んな、負けてはならぬと張り切ってがんばったことが、次々と思ひ浮かんでやみません。戦は長期に入り、女であれ出来るだけのことはしなくてはならぬときが来たのです。邑久郡は、現在邑久町、長船町、牛窓町と当時、邑久郡鶴山村、又、岡山市となった邑久郡豊村、朝日、大宮、太伯、これらの地区が皆邑久郡でした。

広大な千町平野は国民の台所をあづかる穀倉地帯です。田植えをひかえ、麦の收穫やら、人手不足は次第にはげしく、猫の手も借りたとき、そのころは皆学校の子供達は農繁休暇がありました。田植えは共同で行うことが決まり、重労働の日が続く毎日です。ちょうどそのとき、青年団の方達で、邑久郡地区にて牛馬耕講習会を行うことがきまり、各地区より一―二名出席。裳掛より男子の先生と私に参加がすすめられて、一泊二日で、宿舎は旧福田小学校の講堂があてられ、講習地は、現在の長船ゴルフ場であったと思います。そのころの河川敷は土砂がたくさん盛り上がった砂場でした。土地の人は（スカ）と言って誰でも利用出来た所のようにでした。講習前日より私は、ヘントウ腺の熱が三十八・五度……それでも教官の言われるには、一人の落伍者も出さぬようにとの、最初の訓示に薬をのみながらの作業でした。講師の方は、西大寺青少年育成官の方だったと思います。又食事の前には、必ず日の本の親神である、天照皇大神の御歌

◎たなつもの……の本草も天照らす。

神の恵と思え、世の人及び記憶に

◎古野少佐の詩、昭和十六年十二月八日真珠灣に於て

大やまと民ほろぶるかおきるかの

戦なるぞ、我ゆかめやも

目をつむり、声高々と詠じた後、食事が出た。一日一合の米の中に、キャベツの千切りを入れぐつぐつと煮込んだおかゆをすすりながら、四軒家の方の心のこもった接待の漬物をおいしく頂戴した、ありし日のことがしのばれる。一夜明け、体調もよくなり、いよいよ本番です。馬は見た事はあったけれど手をふれたことはなく、（牛鍬）すきを付けると、一目散に駆けだし、ずるずると引きずられながら、なかなか思うように出来ません。何回となく、練習するうち、何とか、田んぼが耕せる（すける）ようになったのです。そのとき牛は一本綱で動くが、馬は二本綱でなければ動かぬ……と教官が教えて下さいました。……人間も、手ごわい、相手のことを一本綱ではゆかんと、そこから始まった、言葉のようでした。帰宅後我が家の田んぼを母と二人で耕した。冒険的な数々のエピソードが、次々と浮かびなつかしくなります。あれから五十余年、高度成長が進んだ今日、肉体労働で買った体であっても、実際私も老人になっている。今年車で当地区を通り、車窓より眺め、変わりゆく邑久町又長船町の発展ぶりに昔日の思がいたしました。赤穂線が通り、駅が出来、工場が続々と建設せられ、住宅が立ち並ぶありさまを見て嬉しくもあり又、記憶のうすいく当時に思いを馳せながら、帰宅の途につきました。事ある度に思い出すことは、親子、兄弟、戦地も銃後も一丸となり、たくさんの人々が尊い犠牲と

なったこと、広域に及んだことです。

大東亜戦を涙なくして語ることは出来ません。当時幼子だった人、又戦後に生まれた子供さん達が立派に成長せられ、国の再建に尽くされた現在、機械化が進み、食糧も物資も十分な世の中で、先代や私達がお願ひすることは二度と起こしてはならない、核戦争と人命尊重とを心において、邑久町はもとより郷土、地域社会のためにお尽くし頂くことを望んでおります。

原爆体験記

南

孝(八十二歳)

福元六〇八一三七

今も原子爆弾の後遺症に悩んでいる者が病魔と戦い苦しんでいます。我々被爆者は老齢化が進み年々少なくなっています。昭和二十年八月六日広島市に原爆が投下されました。私は当時、NHK岡山放送局に勤めていました。早速救援のため食料をリュックサックにつめ北番さんと二人で応援に駆けつけました。汽車は不通でしたが岡山師団の応援隊七〇〇名が急行する軍用列車に山陽新聞の記者一名計三人が便乗させてもらい、七日午前一

時に岡山駅を出発し海田駅まで無停車でそれから先は止まったり動いたりして向洋駅に午前四時半ごろたどりつきました。

明るくなるのを待ち徒歩で出発。向洋駅の近くはそれほどありませんでしたが、広島市に近づくとその無残なものでした。電柱が倒れたりガラスの破片、瓦の破片が飛び散り、電線が乱れ合い足の踏み場も無い有り様でやっと上流川町の放送局に辿り着いたが、門柱だけが残っていて「祇園の原放送所にお越し下さい」との看板があるだけでした。それから市の中心部を歩いて午前十一時ごろ、やっと目的地につきました。

市内は焼け野が原でも悲惨なものでした。詳しく書けば一〇〇頁にも二〇〇頁にもなるでしょう。折角忘れかけた悪夢を呼び起こすだけで切なく、又一ヶ月も二ヶ月も眠れない日々が続くことでしょう。だから書きたくありません。

考えてみると原子爆弾投下の責任は一体どこにあるのか。人類にあるのは間違いありません。爲政者にあると思います。爲政者も数多く、したがって責任はトップが負わなくてはなりません。爲政者のトップはあやまるべきだと思います。もしその人物が亡くなっているならばその子孫でもよい。当時のアメリカの大統領が筆頭であるべきは論を待たない。

戦記

森 輝 雄（七十八歳）

下笠加三〇一番地

あの殺伐とした約六十年もの昔。思い出したくない。暗い暗いわが青春。其れこそ今の私にとって何の益と言えるでしょう。しかし、此のたび戦後五十年誌への寄稿に当たり、半世紀も前の事を思い出し、記述してみることとした。私は旧制中学卒業、昭和十一年志願兵として、支那駐屯軍の一兵員として広漠たる大地で警備にあたる駐屯の任務に就く。昭和十二年七月七日、夜間演習中突如、実弾が飛来。ついに日支事変勃発。誰が詩たか！

熱砂燃ゆ 一文字山に銃とりて

朝に夕べに 守りたる日々夜を

暑しと思はず 過ぎし二十歳の頃そ懐しき

不安不自由は戦場の常

時に演習は空砲ならず

実弾飛来の其の中で。失いし数多戦友

心で祈らん。安らかに

北支永定河畔の竜王廟。恨みも深し宛平懸城。そして蘆溝橋。付近一帯西瓜の畑。昔日コロンブスも食べたんだろう此の西瓜。白兵戦（突撃）や銃撃で、銃身焼けて弾丸尽き。やらねば己がやられる。後に退けぬ戦争の恐ろしさ。中隊長（古市大尉）、幹部、戦友数多、戦死負傷者等々。後方移送等々。炎天下の七月末のころ、部隊編成完了し、愈々北京南苑に向かう。南苑（第二十九軍）の拠点攻撃。敵、味方共に屍累々。其の惨状や余りあり。八月八日ひとまず北支平定なるのか。時に、北京、入城。私たちは直ちに定安門警備。

二旬後私たちは直ちに八達嶺即ち萬里の長城作戦に参加。果てることなく張家口から包頭へ！昭和十五年春浅く白雪残るころ北滿へ！海拉爾へ緊急移動、「ノモンハン事件」に参戦。これが第二次「ノモハン」の戦闘でアルハ河での攻防砂漠地での苦戦。ソ連の火器が優勢。我が軍が劣勢。ここでも地雷をだいて白兵戦あるのみ。実に無駄な戦いでした。敗戦を身に心に感じての海拉爾転進。昭和十六年、関特演により齊々哈爾に移転駐屯。特に記述事項もなく此の地も冬期は白一色。零下三十五度前後の凍結。夜半ともなればかなたで群狼の遠吠え。そして楽しい夏季来れば春秋の感合体で、原野の草花広野一面に恰も「ジュウタン」の如く平和な楽土、自然の風景です。私たちの結婚もそのころでしたか。昭和十八年長女、昭和十九年長男が

生まれ、共に齊々哈爾、南部陸軍官舎で生活を営んでおりました。

しかし、昭和十九年任務のため单身北安へ、そして関東軍情報作業隊へ転出。専ら情報収集に努む。兵員の増強はみるものの、武器は相変わらず乏しい現況。昭和二十年八月十五日終戦も知らぬまゝ、我らは孫呉付近の辺境で、越境ソ連軍と戦闘状態にあり。

一例を挙げれば夜宮中の戦車隊を手りゅう弾で夜襲攻撃に入るときに女性兵士多数悲鳴をあげ右往左往して逃げまどう。私らの切り込み隊は声を聞いて多数と認む。しばらくして終戦の勅令を知る。我らもその土地を移動して、武装解除に応ずることにした。

しかし、前後して脳裏に浮かぶ事、それは「逃亡」に命を懸けることだと決心する。その逃亡の機会を探る。私たちも捕虜となりソ連に移送され抑留の身となり、自由の無い動物にも等しい物体となった。敗戦のはかなさつらさ、自由の無い身を痛感する。無蓋車で次々に移送されて来る戦友たち、どれもこれも髑面ばかり、黒河から対岸の「ブラゴシチェンスク」迄の船の時間からすれば一キロメートル以上だろうか、暗夜の黒龍江は不気味に静かだ。

「ブラゴシチェンスク」の街。ソ連邦も長い大戦でまたこ

の地も荒廃しているのだろうか。いかにも暗い世情の感、尋々た。物資の不自由欠乏極みなり。一例を挙げれば、ソ連人から握手を求められつかの間に腕時計などを強奪され、又手持ちの食料等も略奪される状態。色々災難がある中、旬日にしてシベリア奥地行と使役班に別れ。使役班の住舎の悪いこと、筆舌に表せない状態でした。私たち（数十人）は、ソ連兵の使役として北満（孫呉）で元関東軍貨物廠での荷役となり、ソ連兵嚴戒の下で強制作業に従事。他方孫呉站（駅）では抑留者の移送。空車が南の満州ハルピン方面に！私は九月上旬ころと記憶する。

暗夜を利し数人の仲間と脱走。死を覚悟の逃亡。捕まれば銃殺、軽くて「シベリア」奥地で重労働。絶対今現在が我が身の決断と、考える間も無く発車寸前の貨物列車に飛び乗り、隠れて北安まで南下！北安駅（站）でソ連兵に誰かが銃殺されたらしい。夜半過ぎのこととてさだかでない。未明監視兵を襲いその武器を我が手中にした。自己防衛のため仕方なし。直ちに逃走。中国人の農家に依頼して衣服（中国）を求め食料も些少なから戴いた。基本的に夜間逃避行を主に、妻子の住む齊々哈爾へ！寒さと飢えと疲労、そのうえ身の危険と闘いながら、行けども行けども広野、そして丘陵の続く果てしない原野。一ヶ月あまりの後、遙かに見える灯！心で歓喜しながらようやく齊々哈爾に着いた。しかし尋ねる妻子はどこに。敗戦戦後すなわち

街の状態として日本人に対する環境の異なりよりは正に厳しく敗戦の苦しさをここで痛感する。

其のうち調査で、妻子の消息を得ることが出来た。しかしながら此の市街も日夜危険に晒され、ソ連兵の圧力を逃れ、中国人の密告を恐れ、やっとのこと、旧日本軍関係家族の集う收容所を探知する。まず自分の危険性を排除するため直ちに日本居留民団に登録し、日本人の資格証明を取得。家族ともに市街地の一角に移住する。厳しい寒気と闘いながら妻は二人の子を連れ、ヤミ市場で行商をして生活費捻出。この苦勞筆舌に記し難い。私は旧軍関係者の家族の住む收容所を回り、妻の商売の仕入れに走る。

ときに朗報。愈々！昭和二十一年八月齊々哈爾日本人居留民団に対し日本へ引揚の通告あり。私たち直ちに「齊々哈爾」駅に集合するよう連絡を受け引揚列車（無蓋車）に乗車する。

一路列車は「ハルピン」目指して走行。途中第二松花江下車、八路軍（共産）より中央軍（国民軍）に引渡され徒歩で、長い鉄橋そして土手を、飲む水もなく食物もなく、皆が疲れて疲れ果て、歩いた。土手下では中国人が多数押しかけ避難民（引揚者）の幼児を求めて買っている。常識で考えられない悲惨な地獄絵です。これらの幼児こそが現在の残留孤児たちでしょうか？子供（幼児）たちを中国人に手放す親達もまた悲惨。食

うため、生きるために仕方無いことでしょう。栄養失調で多数の幼児が餓死する様子。色々親たちも考えた末の処置でしょう。

仕方なし。そして中央軍に引渡された私たち引揚者は又も無蓋車に乗せられ長春―奉天―「鼓慮島」の港に。長かった疲れた二十日の旅でした。しかしポツカイ湾の海風は気持ち良く肌感じた。ここ「鼓慮島」でも相変わらず夜半は私たちの幕舎に中国人の略奪の魔手がのび愈々裸一貫となる。すなわち裸一貫また楽しからずやという言葉通り。旬日にして米国の輸送船「リバテイ」に乗船した。これで日本内地に帰れると思うと心の緩みか体中の氣力が失せた。暑い茹る船内はこゝでも地獄のごとし。旬日の後、博多に上陸、何となく温く柔らかい空気が我らのすさんだ心根をやわらげてくれるようだ。船中では朝夕共にとうもろこしの粥と塩汁（中の具は里芋の葉）のみ。上陸後まず復員の手續きを完了し、そして引揚者の手續きともに終え、故郷へ列車は走る。黒煙を吐いて引揚列車の車窓にうつる各市街地の惨状、中でも広島市の街は全くの広野に等しい。岡山に着いても、ほとんど街の姿なく、駅舎と遠くに望む操山、ただ天満屋、中銀の舎影のみ。目に入らぬ烏城の勇姿の無きに驚愕しました。何と悲惨な状態、ただただ驚くばかり。

私たちが家に帰り着くと驚いたことに吉井川の氾濫、水害で家屋一部破壊しており、食料等不自由なため、引揚げて来た私一



定安門警備中の筆者

家は意を決して再び口べらしのため宇部の炭鉱へ！職を求めて再出発。まず家（社宅）の確保と配給上々を求め鉱内夫となりました。苦勞をともした引揚げた家族のために生活の安定を計りたい一心でありました。この度、戦後五十年誌寄稿にさいし、若き日の私（二十歳—三十歳までの）の概略の一部を記述し事例と致します。最後に戦争は二度と絶対繰り返してはならないという思いを心に新にし、大きく叫びたい。平和を！

以上をもって私の五十年前の記録と致します。合掌。

（其のときの写真添付）



ちちハハ爾警備時代の筆者



あ と が き

終戦から五十周年という節目の年を迎え、記念誌「平和への想い」の発刊が計画され、この程、原稿をお寄せ下さった方々の御努力によって、上梓をみる事ができましたことは、誠に喜ばしいことと思えます。

終戦直後、ラジオから「リンゴのうた」が流れ、物はなくても、日本人の顔や、世相になにかしら明るい希望がわいてきたことを今さらのように思い出します。

しかし、五十年の歳月を経た今日、戦争中の苦しい生活や、戦後決意した新生日本への誓いも薄れようとしているかにもえます。その時にあたり、終戦五十周年記念誌が、邑久町民の手によって、生きた体験の歴史として発刊され、また次代を背負う人々への語り部としての役割を果たすことができますことは、大変意義深いものがあると考えられます。

国際人として、また将来を担う若者のための、多くの教訓と、指針となるよう役立てていただけますよう、祈念する次第であります。

終戦五十周年記念誌

「平和への想い」

発行日 平成七年十一月十一日

発行所 岡山県邑久郡邑久町尾張三〇〇一
邑久町保健福祉課

編集者 木村 安雄
万代 三郎

印刷所 フジイ印刷株式会社
岡山県邑久郡牛窓町牛窓四九四七―十七